

Title	【課題研究報告書】日本語学習者のカタカナ語習得に関する諸問題——中国母語話者と英語母語話者を中心に
Author(s)	高, 翔傑
Citation	
Issue Date	2024-03
Type	Thesis or Dissertation
Text version	author
URL	http://hdl.handle.net/10119/18978
Rights	
Description	Supervisor: 本田 弘之, 先端科学技術研究科, 修士(知識科学)

課題研究報告書

日本語学習者のカタカナ語習得に関する諸問題——
中国母語話者と英語母語話者を中心に

GAO Xiangjie

主指導教員 本田弘之

北陸先端科学技術大学院大学
先端科学技術研究科
(知識科学)

令和6年3月

要旨

カタカナ語の習得が数多くの日本語学習者にとっては難点である。それゆえ、日本語学習者のカタカナ語習得過程における諸問題を考察し、および彼ら向けのカタカナ語教育改善策を講じることが日本語研究・教育の一環として、不可欠であると考えられる。

背景として、日本語表記の複雑性、カタカナ語(外来語)表記の不規則性、外来語受容(外来語の歴史変遷・外来語受容の実態・日本人の外来語意識・外来語批判)をそれぞれ詳しく考察した。

本論は、カタカナ語の習得過程において、母語知識、または第二言語知識の影響を大きく受けている中国語母語話者と英語母語話者の日本語学習者に焦点を当て、「PRISMA 2020」にあるフローダイアグラムを利用し、「J-STAGE」、「CiNii」、「国立教育政策研究所教育研究情報データベース」、「国立国語研究所学術情報リポジトリ」、「中国知網」と「Google Scholar」の6つのデータベースから、「中国語母語+カタカナ」、「中国人+カタカナ」、「中国語母語+外来語」、「中国人+外来語」、「英語母語+カタカナ」、「英語母語+外来語」の6組のキーワード(中国知網の場合は特別にキーワードを「日語+外来語」と「日語+片假名」に設けた。)で1999~2023年の25年間の中国語母語話者と英語母語話者のカタカナ語習得・教育に関する文献を収集し、選別した。そして、選び出した35編の文献に基づき、文献総説を行った。

総説はまず先行研究を「中国語母語話者のカタカナ語習得」と「英語母語話者のカタカナ語習得」の2組に分けた。中国語母語話者に関わる文献が28編であり、英語母語話者に関わる文献が7編である。また各組の文献を「カタカナ語認識の傾向」、「習得過程における問題点」と「中国語/英語母語話者向けのカタカナ語教育」の3組に分類し、さらに「中国語母語話者のカタカナ語認識傾向」に関する文献を「カタカナ語に対する意識」、「認識過程における母語知識影響」、「認識過程における英語知識影響」、「カタカナ語に対する学習策略」の4組に、「中国語母語話者のカタカナ語習得過程における問題点」に関する文献を「カタカナ語自体の難点」、「カタカナ語回避現象」、「カタカナ語の誤用傾向」、「日本語教材の不足点」の4組に、「中国語母語話者向けのカタカナ語教育」に関する文献を「カタカナ語の指導」、「日本語教材の改善」、「副教材の導入」、「英語援用の位置付け」、「学習システムの開発」の5組に分けた。英語母語話者の場合は先行研究の数が極少ないので、分類しないまま先行研究を概説した。

そして、全部35件の先行研究の概説内容に基づき、考察が行われた。中国語母語話者の場合は「英語知識影響」、「教材の不足点」、「回避現象」、「母語知識影響」、「指導の不足点」、「誤用」、「苦手意識」、「カタカナ語自体の難点」、「言語環境の影響」の9つの問題点が見られている。それに、「副教材の利用」、「カタカナ語重要性の強調」、「教材中の外来語の増加」、「英語援用」、「システムの利用」、「外来語の選別」、「表記規則の教授」、「語源知識の教授」の8つの面から、教育改善策が提案されている。最後は先行研究の5つの不足点を指摘し

ている。英語母語話者の場合は「英語の母語影響」、「苦手意識」、「異文化受容」、「言語環境」の4つの問題点が見られている。教育改善策は「異文化受容態度の改善」と「外来語の選別」の2つだけ提案されている。最後は先行研究の6つの不足点を指摘している。

全体的に中国語・英語母語話者のカタカナ語習得を対照した結果、両方ともカタカナ語の習得過程において、英語知識の影響を大きく受けていることが明らかになった。それに、両方の外来語(カタカナ語)の誤用種類・パターンに類似性が見られているが、中国語母語話者の誤用数が英語母語話者より多いことが分かった。一方、教育改善策について、両方とも雑多な外来語(カタカナ語)を選別する必要があると主張している。それに、多角的な視点から見ると、英語母語話者の外来語(カタカナ語)習得・教育が重視されていないことが明らかになった。

先行研究を踏まえて、これからの英語母語話者を対象とする多岐にわたるカタカナ語習得・教育研究が期待されている。さらに、教育現場でのカタカナ語の教育改善策を講じて、教育効果を検証することが重視されてほしいと考えられる。特に、「オンライン学習システムの実装」と「教科書の外来語語源・原語の添付」の教育改善策が非常によい教育効果を得ることが想定されている。

文献総説を通して、より説得力のある分析結果をもらえるために、さらに多くの文献を考察すべきであると筆者が考えられる。

目次

第1章 序論.....	01
1.1 研究の目的と方法.....	01
1.2 本論における用語の定義.....	01
1.3 研究の背景.....	02
1.3.1 日本語表記.....	02
1.3.2 カタカナ語(外来語)表記.....	02
1.3.3 外来語受容.....	05
1.3.3.1 外来語の歴史変遷.....	05
1.3.3.2 外来語受容の実態.....	06
1.3.3.3 日本人の外来語意識.....	07
1.3.3.4 外来語批判.....	09
第2章 文献収集.....	12
2.1 文献の収集方法.....	12
2.2 データベースの選択.....	13
2.3 文献の選別.....	13
第3章 中国語母語話者のカタカナ語習得.....	21
3.1 カタカナ語認識の傾向.....	21
3.1.1 カタカナ語に対する意識.....	21
3.1.2 認識過程における母語知識影響.....	26
3.1.3 認識過程における英語知識影響.....	28
3.1.4 カタカナ語に対する学習策略.....	30
3.2 習得過程における問題点.....	34
3.2.1 カタカナ語自体の難点.....	34
3.2.2 カタカナ語回避現象.....	35
3.2.3 カタカナ語の誤用傾向.....	36
3.2.4 日本語教材の不足点.....	38
3.3 中国語母語話者向けのカタカナ語教育.....	40
3.3.1 カタカナ語の指導.....	40
3.3.2 日本語教材の改善.....	41

3.3.3 副教材の導入.....	42
3.3.4 英語援用の位置付け.....	42
3.3.5 学習システムの開発.....	46
第4章 英語母語話者のカタカナ語習得.....	50
4.1 カタカナ語認識の傾向.....	50
4.2 習得過程における問題点.....	56
4.3 英語母語話者向けのカタカナ語教育.....	57
第5章 考察.....	58
5.1 中国語母語話者の場合.....	58
5.2 英語母語話者の場合.....	62
5.3 中国語・英語母語話者の習得対照.....	63
今後の課題.....	65
謝辞.....	66
参考文献.....	67

第一章 序論

1.1 研究の目的と方法

本論は日本語学習者のカタカナ語習得に関する諸問題を考察する文献総説である。日本語習得・教育に関わる国内外の研究は数多くあるが、特にカタカナ語習得・教育における問題点に着目する研究が少ない。さらに、それらの問題に対して具体的な改善案を提示した研究もごくわずかである。本論は母語の影響を大きく受け、カタカナ語を回避しがちな中国語母語話者、及び母語干渉で、カタカナ語に戸惑いを感じる人が多い英語母語話者に焦点を当て、両方のカタカナ語習得過程における諸問題、さらに彼ら向けのカタカナ語教育を熟考し、日本語学習者の立場から、改善案を提案することを目的とする。

研究方法として、日本語教育の研究分野において、これまでの母語話者別のカタカナ語習得・教育に関する研究は、全体的なカタカナ語習得・教育、または日本語の他の語種の習得・教育に比べ、注目されてきたとは言えないが、完全に無視されてきたわけではなく、それなりの数の研究が発表されている。しかし、それらの研究成果を総括してレビューし、「〇〇話者カタカナ語習得・教育の全体像」が明らかにされたことはない。そこで、本課題研究では、これまでに公開された中国語母語話者および英語母語話者のカタカナ語習得・教育に関する研究を可能な限り網羅し、それらを読み、分類して考察することにより、現時点での成果を明確に提示しようとする試みである。具体的には、「PRISMA 2020」のフローダイアグラムに基づき、いくつかのキーワードを設け、複数のデータベースから関連の研究文献を収集し、選別する。そして、選び出された文献の概説をして、考察するという流れである。

1.2 本論における用語の定義

本論で述べるカタカナ語は、外来語・カタカナ語の「併用」である。カタカナで表記される和製英語、及び和語・漢語のカタカナ表記語が含まれない。理由として、カタカナ語のことを直接に外来語と呼んでいる先行研究が多い。

その「カタカナ語＝外来語」現象が現れている原因は、現代日本語の表記では、語種の認定が前提となり、次の3つの表記規則がある。規則1：漢語は「漢字」で書く。規則2：和語は「漢字」または「ひらがな」または「両者の交ぜ書き」で書く。規則3：外来語は「カタカナ」で書く。しかし、日本語表記の実態はどうであるか。成田・榊原（2004）は次のように指摘している。

しかし、最近ではこの規則に合致しない、和語や漢語のカタカナ表記例が多くなっている。
(中略) どの語が外来語であるかという認識の少なくとも一部は、実は、カタカナで書かれ

ている、ということに依存している。いまの子どもたちは、最初から、たとえば「メガネ」「カラオケ」「ケータイ」のように、カタカナ表記された形でこれらの語に出会うことになる可能性が高くなってきた。とすると、これらの語を外来語と思っても不思議ではないことになる。(成田・榊原, 2004 : 41-54)

つまり、外来語認識の不足やカタカナ語の分別が必要ではないなどの理由で、外国人日本語学習者だけでなく、母語話者としての日本人も大量のカタカナ語の中から、はっきりと外来語を見分けることができないことが多いそうである。

1.3 研究の背景

1.3.1 日本語表記

日本語は、視覚入力媒体を表意文字(1 漢字)、表音文字(仮名 : 2 ひらがな、3 カタカナ)の3つの文字形態を交ぜて文章を構成させる、世界でも稀有な言語である。(中略)日本語のように3つの文字形態を日常的に書き言葉の中で使う言語は他には存在しないことは広く知られている。(篠塚・窪田, 2012 : 97-98)

日本語の文字表記については、一般の社会生活における国語表記の目安とされているのは、「国語施策情報>内閣告示・内閣訓令」に収録された『常用漢字表』(2010年内閣告示第2号)、『現代仮名遣い』(2010年内閣告示第4号)、『送り仮名の付け方』(2010年内閣告示第3号)、『外来語の表記』(1991年内閣告示第2号)と『ローマ字のつづり方』(1954年内閣告示第1号)である。それにより、日本語の文字表記が複雑されたことが分かった。村越(1998)は、次のように指摘している。

『複雑化された日本語の文字表記』とは、一つには、英語などのように、単一の文字によって表記するのは異なり、漢字、平仮名、片仮名の三種類の文字、あるいは日常的に見ない日はないほど、頻繁に使用されているローマ字を加えれば、四種類になるという具合に、複数の文字によって表記することを意味し、さらには、四種類の文字による表記自体がすでに複雑であるが、それに増して、四種類の文字を固定的な方法で使用するだけでは済まず、自由に使い分けをすることで、文字表記が一層複雑化されてきたことを意味する」(村越, 1998 : 11)

1.3.2 カタカナ語(外来語)表記

その「複雑化された日本語の文字表記」の中、日本「1991年内閣告示第2号」により、一般の社会生活において、現代の国語を書き表すための「外来語の表記」のよりどころ

を、次の「外来語の表記に用いる仮名と符号の表」のように定めされた。(図1) それに、「留意事項その1(原則的な事項)」、「付留意事項その2(細則的な事項)」と「付録(用例集)」も告示された。しかし、これらの中に語基・語幹・語根などの造語法に関する公式的な規則が一切存在していない。表記原則としては、自由すぎると考えられる。

日本語研究者たちにより、「日本語には英語からの外来語が多数存在しているが、しかし基本的に二種類に分けられている。(中略) これらの和製外来語は二つの原則がある。1つは原語の発音に従うこと(原音原則)であり、もう1つは原語の単語を変形させ、或いは短縮させて作られること(省略原則)である」(王, 2021: 86)のような表記原則が観察されている。それに、一般財団法人テクニカルコミュニケーター協会編『外来語(カタカナ)表記ガイドライン—第3版』(図2)や社団法人共同通信社編『記者ハンドブック—第14版—新聞用字用語集』などの参考資料も存在している。しかし、それらの基準は参考にすぎなく、表記を強制するものではない。

従って、今実際の外来語表記には、それぞれの分野の慣用により、自由で、不規則で、大きな揺れがある一面が見られている。和語や漢語は造語法などの規則で効率的に日本語学習者に教えることができるが、外来語はその教授法に適用しない。

外来語の表記 「外来語の表記」に用いる仮名と符号の表					
1. 第1表に示す仮名は、外来語や外国の地名・人名を書き表すのに一般的に用いる仮名とする。 2. 第2表に示す仮名は、外来語や外国の地名・人名を原音や原つづりになるべく近く書き表そうとする場合に用いる仮名とする。 3. 第1表・第2表に示す仮名では書き表せないような、特別な音の書き表し方については、ここでは取決めを行わず、自由とする。 4. 第1表・第2表によって語を書き表す場合には、おおむね留意事項を適用する。					
第1表					
ア	イ	ウ	エ	オ	
カ	キ	ク	ケ	コ	シエ
サ	シ	ス	セ	ソ	チエ
タ	チ	ツ	テ	ト	ツア ツオ
ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ	ティ
ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ	ファ ファイ フェ フォ
マ	ミ	ム	メ	モ	ジェ
ヤ		ユ		ヨ	ディ
ラ	リ	ル	レ	ロ	デュ
ワ					
ガ	ギ	グ	ゲ	ゴ	
ザ	ジ	ズ	ゼ	ゾ	
ダ		デ		ド	
バ	ビ	ブ	ベ	ボ	
パ	ピ	プ	ペ	ポ	
キャ		キュ		キョ	
シャ		シュ		ショ	
チャ		チュ		チョ	
ニャ		ニユ		ニョ	
ヒャ		ヒユ		ヒョ	
ミャ		ミユ		ミョ	
リャ		リュ		リョ	
ギャ		ギユ		ギョ	
ジャ		ジュ		ジョ	
ビャ		ビユ		ビョ	
ピャ		ピユ		ピョ	
ン	ン (撥音)				
ッ	ッ (促音)				
ー	ー (長音符号)				
第2表					
					イエ
					ウエ ウオ
					クエ クオ
					ツイ
					トゥ
					グァ
					ドゥ
					ヴァ ヴィ ヴェ ヴォ
					テュ
					フュ
					ヴュ

(図1) 外来語の表記に用いる仮名と符号

目次

■適用範囲	6
■引用規格	7
■用語の定義	8
■規定事項	9
(1) 長音の表記	9
(1-1) 英語の語尾の -er、-or、-ar、*y にあたるものは、原則として長音とし長音符号「ー」を用いて書き表す。	9
(1-2) 「ai」「a+子音字+e」「o」など、発音記号が“ei”、“ou”などのアクセントのある二重母音になる表記には長音符号「ー」を充てる。	10
(1-3) 英語の語尾の -re にあたるものは、原則として長音符号「ー」を付けない。	11
(1-4) 複合語になっても、「長音符号を付ける／付けない」の規定に変化は無い。	12
(2) アイウエオの大小	13
(2-1) 「ウイ／ウィ」「ウエ／ウェ」「ウオ／ウォ」は「ウイ」「ウエ」「ウオ」を充てる。ただし、原語が「-ware」の場合は「ウェア」を充てる。	13
(2-2) 「クア／クァ」「クイ／クィ」「クエ／クェ」「クオ／クォ」は、「クア」「クイ」「クエ」「クオ」を充てる。	13
(2-3) 「ファ／ファ」「フィ／フィ」「フェ／フェ」は、「ファ」「フィ」「フェ」を充てる。	14
(2-4) 「fo」「pho」の表記は「フォ」を充てる。	14
(3) 原語の「V」音には「バ」「ビ」「ブ」「ベ」「ボ」を充てる。	15
(4) 原語が「ti」「di」および「de」の場合の表記	16
(4-1) 原語表記の「ti」には「チ」を充てる。ただし、原語が「tion」の場合は「ション」を充てる。	16
(4-2) 原語表記の「di」には「ディ」を充てる。	16
(4-3) 原語の「de」には「デ」を充てる。	17
(5) 表記が「ia」で発音が/ɪə/の場合は「(イ)ア」を充てる。	19
(6) 語頭の「re」「pre」の表記は、「リ」「プリ」を充てる。	20
■附属書	
表記と原語の一覧	22
ー解説ー	
■カタカナ表記ガイドラインに対する学識者からの推薦のことば	39
■参考	45
■補足	47

(図2) 外来語(カタカナ)表記ガイドライン—第3版

1.3.3 外来語受容

1.3.3.1 外来語の歴史変遷

日本語学習者にカタカナ語(外来語)習得の必要性を説明するためには、現代日本語における外来語の位置付け、それと今日本社会の外来語受容実態を究明する必要があると考えられる。

日本語の外来語は中国語が起源である。4~5世紀には中国語(漢語)がすでに朝鮮半島を経由して日本社会に受容され、されに漢字に基づき、日本独自の仮名文字(ひらがな・カタカナ)が作り出された。中国語(漢語)を借用し、定着してきた時期が古すぎるので、現代日本社会において、中国語(漢語)が外来語である意識があまり存在していない。中国語(漢語)を除き、外来語は16世紀のポルトガル語が最初である。17世紀の江戸時代にオランダ語の多い言葉も外来語として定着してきた。これらの古い時代に流入した西洋語を「渡来語」と称されている。その後、19世紀初めから、英語、フランス語とドイツ語が外来語として受容されはじめたが、明治の文明開化期まで、欧米から流入した外来語は日本語の一般的な日常用語として普及されてなかった。

西欧人がはじめて日本に来たのは、1543年種子島に漂着して鉄砲を伝えたポルトガル人であるといわれている。それ以後日本に、ポルトガルやスペインとの通商やキリスト教の布教などを通じて、南蛮文化と称される西洋文化がもたらされ、日本人の精神生活におおきな影響をおよぼした。それは今も残る言葉のうえにはっきりとあらわれている。しかしポルトガルやスペインからの文化の流入も、1639年江戸幕府の鎖国政策によって途絶えることになった。ついで日本が学んだのはオランダ語である。オランダ語は蘭学として江戸時代を通じて学習されていた。それは、鎖国下の日本にあってオランダが西欧唯一の通商国であったことによる。(略)フェートン号の長崎入港事件をきっかけとして、江戸幕府は翌1809年2月、国防上の必要から長崎のオランダ通詞に英語とロシア語の研修を命じた。これが日本における最初の英語学習といわれている。ちなみにフランス語の学習はフェートン号の日本来航半年前から開始され、ドイツ語の学習は1860年代にはいつからである。(清水, 2010: 3-4)

明治維新により、日本は文明開化の時代に入った。欧米からの外来語が本格的に増殖しはじめた。文明開化熱が高揚し、英語の学習熱が高まり、正則英語の教育も推進されていた。しかし、大正時代に入り、すでに欧米列強に並ぶ帝国となった日本は誇りを感じて、「国民的独立の精神」や「日本の精神」を守るために、「英語廃止論」が提案されてしまった。1923年日英同盟の廃止をきっかけに、英語廃止の声がより高まってしまった。その後、第二次世界大戦が始まった。やがて英語は敵国語となり、多くの英語外来語が変な日

本語に置き換えられたが、生活に密着した言葉が多かったので、英語外来語を全廃することは、戦争中の日本社会でも無理であった。

1945年、戦敗国になった日本はアメリカ軍の占領により、英語ブームを迎えた。英語起源の外来語が急速に増えていた。それとともに、尾崎行雄の「漢字亡国論」のような「漢字廃止論」が盛り上がっていた。その後、東京オリンピック(1964)から大阪万国博覧会(1970)にかけて、英語ブームが再燃し、今まで英語外来語は常に増殖し続けてきた。清水(2010)は次のように述べている。

街には横文字があふれかえり、多くの日本人が競って英語を学ぼうとした。その結果、わずか32頁の『日米会話手帳』(誠文堂新光社、1945)がベストセラーとなり、NHKの「カムカム英語」という英会話番組が大人気となった。アメリカ文化・占領軍文化が、敗戦直後の貧しい日本人の目に強烈に植えつけられ、その後の日本の衣食住すべてにおけるアメリカナイズ、英語起源のカタカナ言葉の氾濫は、まさにこの占領期を一つのバネとして生まれたものである。(清水、2010:9)

1.3.3.2 外来語受容の実態

それでは、今の日本社会において、外来語受容の実態はどうであるか。

1956年、国立国語研究所は雑誌の語彙について大規模調査を行った。その報告『現代雑誌九十種の用語用字第三分冊一分析』により、語種ごとの異なり語数を見ると、和語が36.7%、漢語が47.5%、外来語が9.8%、混種語が6.0%である。その一方、延べ語数を見ると、和語が53.9%、漢語が41.3%、外来語が2.9%、混種語が1.9%である。外来語を和語や漢語に比較すると、頻繁に使われていなかったことが分かった。

しかし、この調査からかなり時間が経過し、結果が現代に合わないようになった。1994年、国立国語研究所はもう一度現代雑誌(1994年)を対象として、語彙調査を行った。その報告『現代雑誌200万字言語調査の語彙表データ』では、語種ごとの異なり語数を見ると、和語が25.7%、漢語が34.2%、外来語が33.8%、混種語が6.4%である。一方、延べ語数では和語が35.7%、漢語が49.9%、外来語が12.3%、混種語が2.1%である。1956年の調査結果に比べ、雑誌に使われていた外来語の割合が3倍以上となり、著しく増加していた。

テレビ放送における外来語の使用実態について、大西勝也(1993)によると、1992年にNHK「BSファッション情報(パリ・コレクション)」を調査した結果、番組全体で4秒に1語の割合で外来語が使用されていた。とくに多い場面では19秒のコメントの中に17語の外来語が使われていた。少し古いデータであるが、最近は同じような調査が行われていないそうである。しかし、現在の日本のテレビ番組を調査すれば、外来語の使用頻度が1992年の調査より、大幅に上がっていることが予想できる。

1.3.3.3 日本人の外来語意識

その増殖し続ける外来語に対し、今の日本人はどんな態度を示しているか。

2022年にNHK放送文化研究所は「日本語のゆれに関する調査」を行い、20歳以上の男女(全国)4000人を対象として、外来語に対する考え方を調査した。全体の結果により、〈外来語か翻訳表現か〉(図3)について、「新しい物や考え方が入ってきたら、外国語を日本語に訳して使うほうがよい」と答えた人が全員の30%を占める。「新しい物や考え方が入ってくるから、外来語が増えるのは当然だ」の回答が64%で主流である。〈外来語の増加について〉についても、「外来語かこれ以上増えるのは、日本語があいまいになるので反対だ」の回答が31%で、「外来語が増えることは、日本語を豊かにするから賛成だ」の回答が60%で多数派である。いずれも「外来語支持派」が主流であるが、年代別(図4)に見ると、いずれも明確な年代差が観察されている。若い年代ほど、外来語を賛成する声が大きいが、2002年に行った同じ内容の調査の結果と対照してみると、2つの項目とも、結果の変化が小さいと見られる。

図12 〈外来語か翻訳表現か〉(全体)

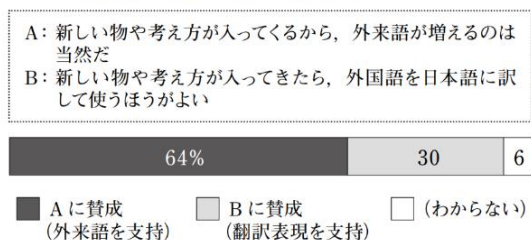
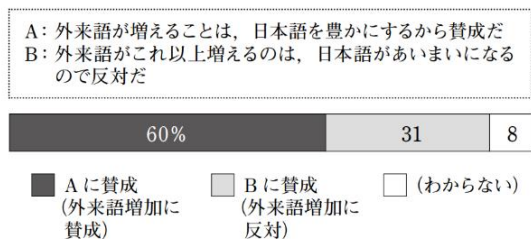


図13 〈外来語の増加について〉(全体)



(図3)

図15 〈外来語か翻訳表現か〉(年代別)

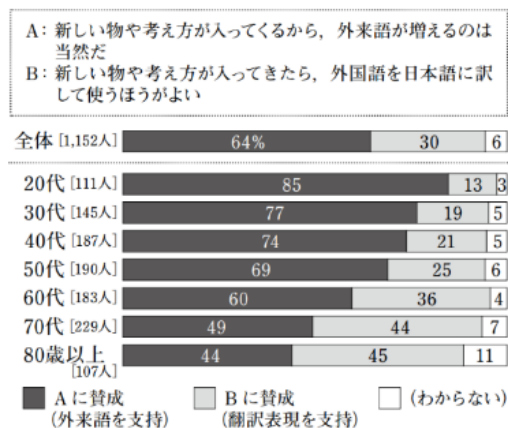
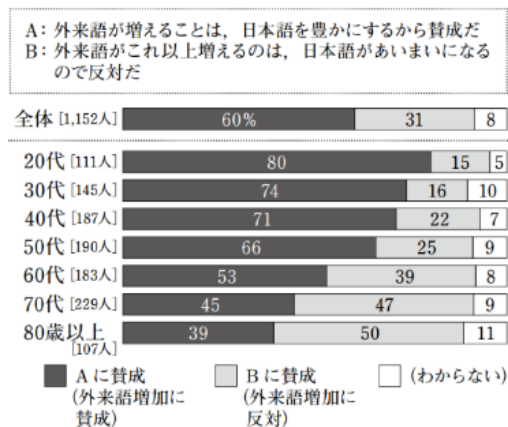


図16 〈外来語の増加について〉(年代別)



(図4)

2013年に文化庁が全国16歳以上の男女3523人を対象として行った平成24年度「国語に関する世論調査」は、外来語や外国語などのカタカナ語の使用について、3つの問を立てた。「日頃、読んだり聞いたりする言葉の中に、外来語や外国語などのカタカナ語を使っている場合が多いと感じるか」(図5)の回答の中、「よくある」(42.5%)と「たまにはある」(32.2%)を合わせた「ある(計)」は74.6%で、多数であるが、前回の調査結果(平成19年度調査)と比較すると、12ポイント減少した。「多いと感じることはない」の回答が24.4%で、前回より13ポイント増加した。

(数字は%)

	よくある	たまにはある	ある(計)	多いと感じることはない	分からない
平成24年度	42.5	32.2	74.6	24.4	0.9
平成19年度	57.7	28.4	86.1	11.9	2.0
平成14年度	56.6	29.5	86.2	12.1	1.7
平成11年度	51.6	32.2	83.9	13.8	2.3

(図5) カタカナ語使用の頻度

「日頃、読んだり聞いたりする言葉の中に出てくる外来語や外国語などのカタカナ語の意味が分からずに困ることがあるか」(図6)を尋ねた結果、「よくある」と「たまにはある」を合わせた「ある(計)」と回答した人は78.5%で、8割弱の多数である。「困ることはない」は20.9%である。それに、結果に年齢別の差が見える。(図7)年齢が高いほど、「ある(計)」と回答した人の割合が高くなる傾向がある。

(数字は%)

ある(計)		困ることはない	分からない
78.5		20.9	0.6
よくある 21.0	たまにはある 57.5		

(図6) カタカナ語の語彙理解度

(数字は%)

	16~19歳	20代	30代	40代	50代	60歳以上
ある(計)	59.5	70.9	72.5	78.6	83.6	81.4

(図7) カタカナ語の語彙理解度の年代差

「日常生活の中で、外来語や外国語などのカタカナ語を交えて話したり書いたりしていることを好ましいと感じるか」(図8)について、「別に何も感じない」と回答した人が全体の54%を占め、最も多い。前回の調査結果(平成19年度調査)と比較すると、10ポイント増加した。「どちらかと言うと好ましくないと感じる」が35.3%で、前回より5ポイント減少したが、依然として少数とは言えない。

	どちらかと言うと 好ましいと感じる	どちらかと言うと 好ましくないと感じる	別に何も感じない	分からない
平成24年度	9.3	35.3	54.0	1.4
平成19年度	14.5	39.8	43.7	2.0
平成14年度	16.2	36.6	45.1	2.0
平成11年度	13.3	35.5	48.8	2.4

(図8) カタカナ語使用に対する好感度

結論として、現代日本社会において、外来語の受容度がかなり高いとは言える。外来語の使用に別に何も感じていない人が半数以上であったことは、外来語がすでに日本語に融け込んでしまった証明である。外来語の増殖に反感を抱かなく、外来語が日本語の変遷にポジティブな効果をもたらせると思っている人が多数である。それに、外国語を和語に訳して使うより、そのまま外国語を外来語に置き換えて使ったほうが良いと思っている人も半数以上の多数派である。

しかし、外来語の増殖に賛成する人が多数であるが、そう思っていない人も4割程度いるので、決して無視できる人数ではない。一方、一部の外来語の意味が分からずに困ったことがある人は圧倒的に多い。外来語の使用を好ましくないと感じている人も3割以上である。従って、外来語の受容に問題がないと言えば、まだまだ早い。外来語に対し、昔でも今でも批判の声が大きい。

1.3.3.4 外来語批判

外来語に対する批判が常に存在している。近代において、大正時代に独立の精神を守るために生まれた「英語廃止論」も、昭和時代に戦争による敵国語全廃ブームも、いずれも政治色が強かった。現代に入った後も、政治色のある言語政策がまだ多く存在しているが、それより、言語学の視点から外来語を評価する声が大きくなっている。

コミュニケーションや国際化時代の日本語の在り方から見た外来語・外国語増加に伴う問題点としては、日本語によるコミュニケーションを阻害、社会的な情報の共有を妨げるおそれ、世代間コミュニケーションの障害、日本語の表現をあいまいにする、意味のあいまいな語の使用により全体が明快で論理的な表現にならなくなる、などが考えられる。(井上他, 2006: 12)

上述の通り、取り入れた外来語が在来の日本語と衝突する可能性が高い。その矛盾を解消しないと、言葉遣いの混乱を招き、日本語全体が論理性を失うおそれがある。山田・難波(1999)は、次のように比喻している。

同一の指示対象を在来の日本語と外来の言葉という二重の表現形式で取り扱おうというのだから、問題が生じないほうがおかしいのであろう。(中略)容器が二つあるのにそれに盛るべきものが一つでは、取り替えながら使うとしても容器の片方が常に一時的に不用となるのは明らかである。(山田・難波, 1999: 144)

それに、外来語の氾濫は日本語のシステムにも悪い影響を及ぼしている。(山田・難波, 1999)は次のように指摘している。

問題は、意味の見えにくいこれらの言葉は、「丸暗記」という効率の悪い方法によってしか処理できないという点にある。「丸暗記」による言語学習の最大の弱点は、ことばの生命とも言える意味のネットワークを作りにくいということ、そのため他の言葉との連想関係が生まれにくいということである。結果的に、これら透明度の低い言葉が増えれば増えるほど、それによって構成されるメッセージもつながりの悪い不透明なものになっていく。(山田・難波, 1999: 173)

つまり、外来語の氾濫は日本語の生命力を削ぎ取っているほか、言語情報の透明度を下げて、隠語化させてしまうことは大きな問題である。

外来語増殖のおかげで、日常生活や専門分野の言葉遣いが便利になったのは事実であるが、それとともに、語彙の理解やコミュニケーションにおいて、多くの問題が生じてしまった。山田(2007)は現代日本語の外来語を3種類に分けて、次のように解説している。

【第一型】＝未処理の外来語　ユビキタス, インキュベーション, ニッチなど

【第二型】＝処理が進行中の外来語　ガーデニング, ケア, クッキングなど

【第三型】＝処理が終了している外来語　ラジオ, ノート, ボールなど

ご想像の通り、コミュニケーションにおいて問題を生じるのは日本語化が済んでいない外来語でなかでも第一型のものはほとんど生のまま日本語の中に投げ込まれた外国語である。私の調査では、外国語をカタカナ書きしただけで世間に投げ出す風潮が現れたのは、およそ一九七〇年代である。それは、外国映画のタイトルにおいてははっきりと観察できる。この風潮は衰えることなく今日に及んでおり、今では映画のタイトルだけでなく、ありとあらゆる外国語がカタカナ書きしただけで日本語に取り込まれている。(山田, 2007: 24-25)

確かに、この第一型外来語の氾濫により、外国映画のタイトルなどの日常生活で出会う言葉の意味推測がどんどん難しくなっていくと考えられる。それに、外国語知識の有無により、人それぞれの「外来語語彙力」に差が生じる。特に3.3節のデータが示したよう

に、年齢別に見ると、異年齢の人は外来語に対する受容性に差があるので、コミュニケーションを妨げて、「コミュニケーションの隠語化」という問題が深刻になることが予想できる。さらに英語起源の第一型外来語の急増により、将来の日本人は英語母語話者より外来語語彙力が低くなり、「母語話者失格」になる可能性もあると考えられる。

鈴木（2000）は、外来語使用の激増に、「外来語が日本人の言語生活を豊かにするものと肯定的に受け止める人の目には、まさに百花繚乱と映るだろうし、また日本語の純粋性を大切に思う人々にとっては、百鬼夜行としか言いようがないと思う。実のところ、外来語の問題は驚くほど多岐にわたる側面を持っていて、これを真正面から取りあげようとするれば大変な仕事になってしまう」と述べている。

今の外来語受容と使用の実態を分析すると、外来語の問題がまだ山ほどあり、多岐にわたる側面を持っている。日本語学習者や教育者として、その現実を無視してはいけない。しかし、今の日本では外来語が重要な位置を占め、その増殖を抑止することは不可能に近いと考えられる。外国人日本語学習者にとっても同じである。中国語母語話者として、外来語を漢語・和語に置き換えて学習することも、英語母語話者として、外来語学習の代わりに英語知識だけを援用することも、いずれも非現実的な発想に違いない。

従って、外来語の受容・利用方法を改善しながら、外来語の問題を究明し、解決してみることがいま外来語受容の最も適切な道であると考えられる。

第二章 文献収集

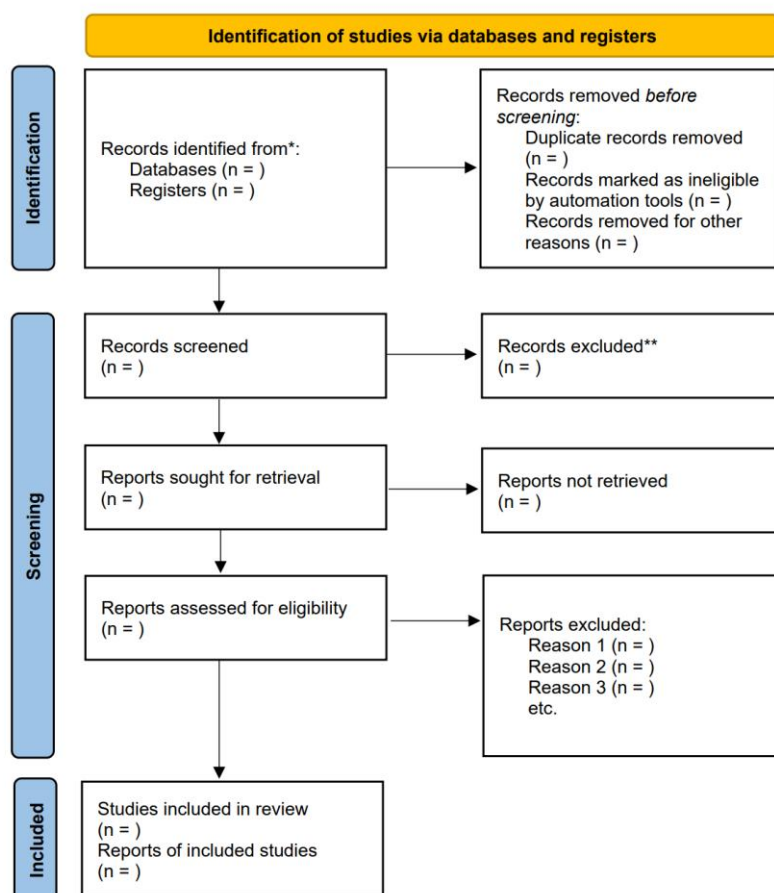
2.1 文献の収集方法

本論は文献総説であるので、先行研究を徹底的に調査し、比較して共通点や相違を見出して分析する必要がある。その先行研究の文献を収集する方法として、システマティック・レビュー(SR)によく使われている「PRISMA 2020」というSR報告ガイドラインのフローダイアグラム(図9)に基づき、複数のデータベースから、文献を収集する。

そのフローは、情報源(データベース)を選択し、キーワードを設けて文献を識別した後、いくつかの除外基準に従い、その識別されてきたすべての文献の中から、特定の文献を選び出すという流れである。

データの収集プロセスで、自動化ツールを利用することは普通であるが、本論において、選び出された文献の数が多くないので、自動化ツールを利用しない。

PRISMA 2020 flow diagram for new systematic reviews which included searches of databases and registers only



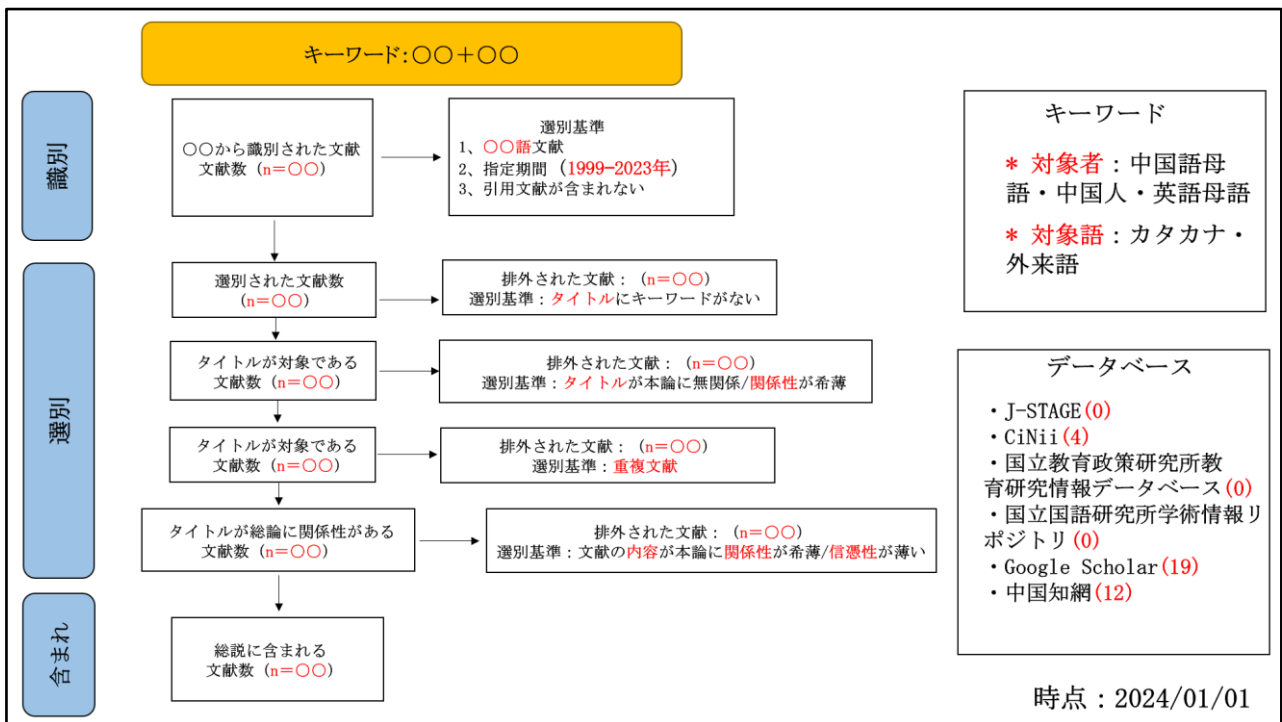
(図9) 「PRISMA 2020」フローダイアグラム

2.2 データベースの選択

データベースの選択について、本論は「J-STAGE」、「CiNii」、「国立教育政策研究所教育研究情報データベース」、「国立国語研究所学術情報リポジトリ」、「中国知網」と「Google Scholar」、合わせて6つの権威性が比較的に高いデータベースを選択し、利用する。これらのデータベースを選択する理由として、「J-STAGE」と「CiNii」は、日本国内の学術的な権威性が高いデータベースであり、この2つのデータベースを利用したら、日本語教育に関する主流意見が分かれる。「国立教育政策研究所教育研究情報データベース」と「国立国語研究所学術情報リポジトリ」は日本語(国語)の研究・教育分野において、権威性が非常に高い。それに、日本語教育に関するデータや文献が多く収録され、本論との関係性が強いと考えられる。「中国知網」は中国で出版された学術雑誌と学位論文のほとんどを収録してきたので、中国語母語話者を対象とする日本語教育の文献も多くある。「Google Scholar」は膨大な数の文献をカバーしており、幅広い学術情報・データを検索することができる。本論において、一番使われるデータベースである。

2.3 文献の選別

上述の通り、本論は「PRISMA 2020」のフローダイアグラムに基づき、以下のフローを作り、文献収集・選別を行う。(図10)



(図10) 文献選別フローダイアグラム

キーワードの選定について、本論の対象者は中国語母語話者と英語母語話者であるが、多数の中国語母語話者は中国人であるので、「中国人」もキーワードの1つにされる。それに、本論の考察内容はカタカナ語の習得・教育であるが、カタカナ語のことを直接に外来語と呼んでいる先行研究が多いので、「外来語」もキーワードの1つにされる。さらに、本論は1つのキーワードだけではなく、2つのキーワードを組み合わせ、文献を検索する。その結果、キーワードは「中国語母語+カタカナ」、「中国人+カタカナ」、「中国語母語+外来語」、「中国人+外来語」、「英語母語+カタカナ」、「英語母語+外来語」の6組にされる。しかし、中国知網の場合、日本語教育に関する文献のほとんどは中国人学習者を対象とするので、特別にキーワードを「日本語+外来語」（日本語+外来語）と「日本語+片假名」（日本語+カタカナ）に設ける。

選定したキーワードで識別される文献は5回の排外を経て、選び出されるのは総説に含まれるようにする。具体的に以下の通りである。

1回目の選別は3つの基準に従った。1つ目は使用言語について、中国語母語話者に関するキーワードで検索する時、中国語と日本語に限定された。英語母語話者に関するキーワードで検索した時、英語と日本語に限定された。2つ目は指定期間について、直近3～5年間の文献を利用すれば、今の研究実態を把握できるが、近年の関連文献が非常に少ないので、指定期間を1999～2023年の25年間に伸ばさないといけなかった。3つ目は文献の本文ではなく、引用文献にキーワードが含まれている可能性があるため、そのような文献を除外する必要がある。

2回目の選別は「タイトルにキーワードがない」という基準に従った。理由として、日本語教育に関する文献の内容全体において、カタカナ語や外来語などのキーワードに言及したことが普通であるので、出現する頻度が高すぎた。タイトルに限定しないと、選別できなかった。しかし、この段階でほとんどの文献が排外され、10000編以上の文献が10編以下しか残らなかったのは普通である。その原因は2つあると考えられる。1つ目は2つのキーワードの組み合わせは1つのキーワードよりかなり厳しくて、選び出された文献数が少ないことが予想通りである。2つ目は特に中国語母語話者や英語母語話者に注目し、カタカナ語習得・教育を研究する文献がそもそも少ないそうである。すなわち、今までのカタカナ語習得・教育に関する研究は日本語学習者の母語影響に焦点を当ててないことが分かった。

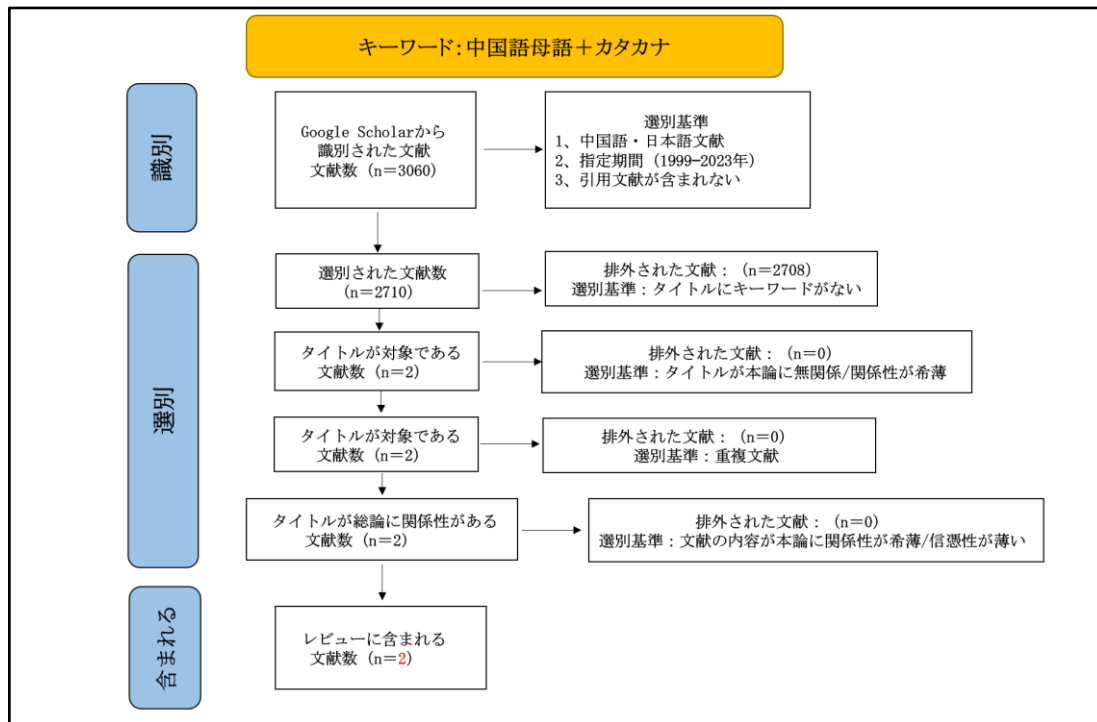
3回目の選別基準は「タイトルが本論に無関係/関係性が希薄」である。タイトルにキーワードが含まれても、本論の主旨と関係性が薄い場合、その文献が排外された。

4回目の選別基準は重複文献であるかどうか。いくつかのデータベースを情報源にしたので、複数のデータベースに収録され、重複している文献がある。その重複している文献が排外された。

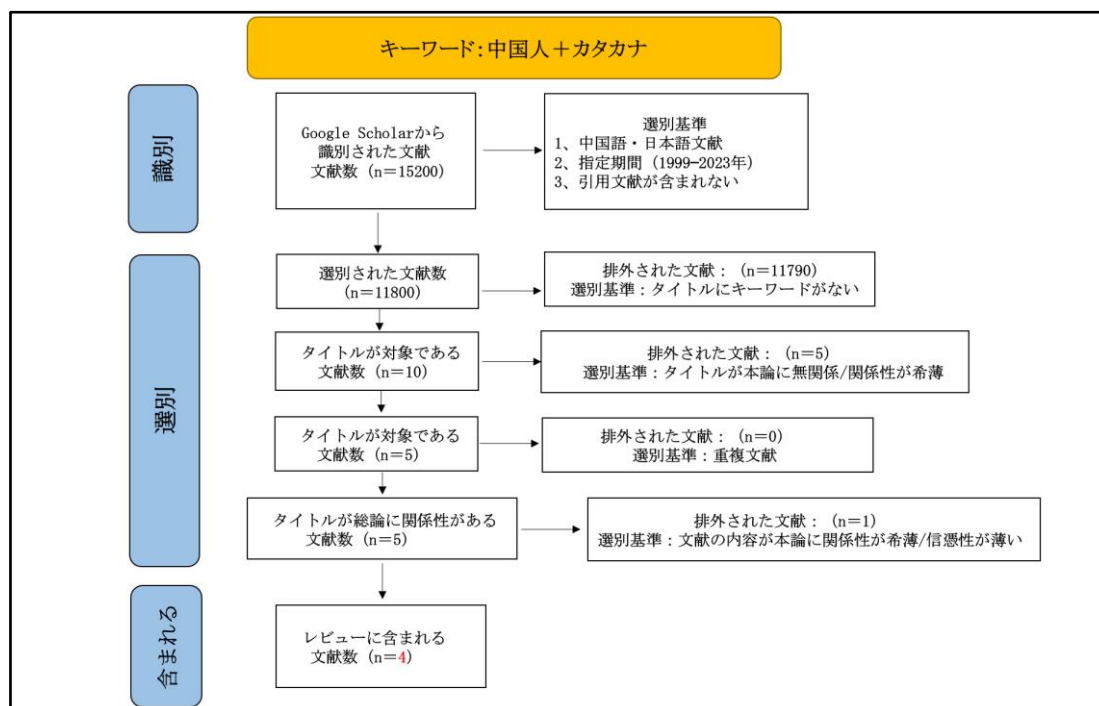
最後の5回目の選別は「文献の内容が本論に関係性が希薄/信憑性が薄い」である。上述の基準を満たしても、文献の具体的な内容は本論に関係性が薄い場合、また文献自体が

信憑性に欠ける場合、その文献が排外された。

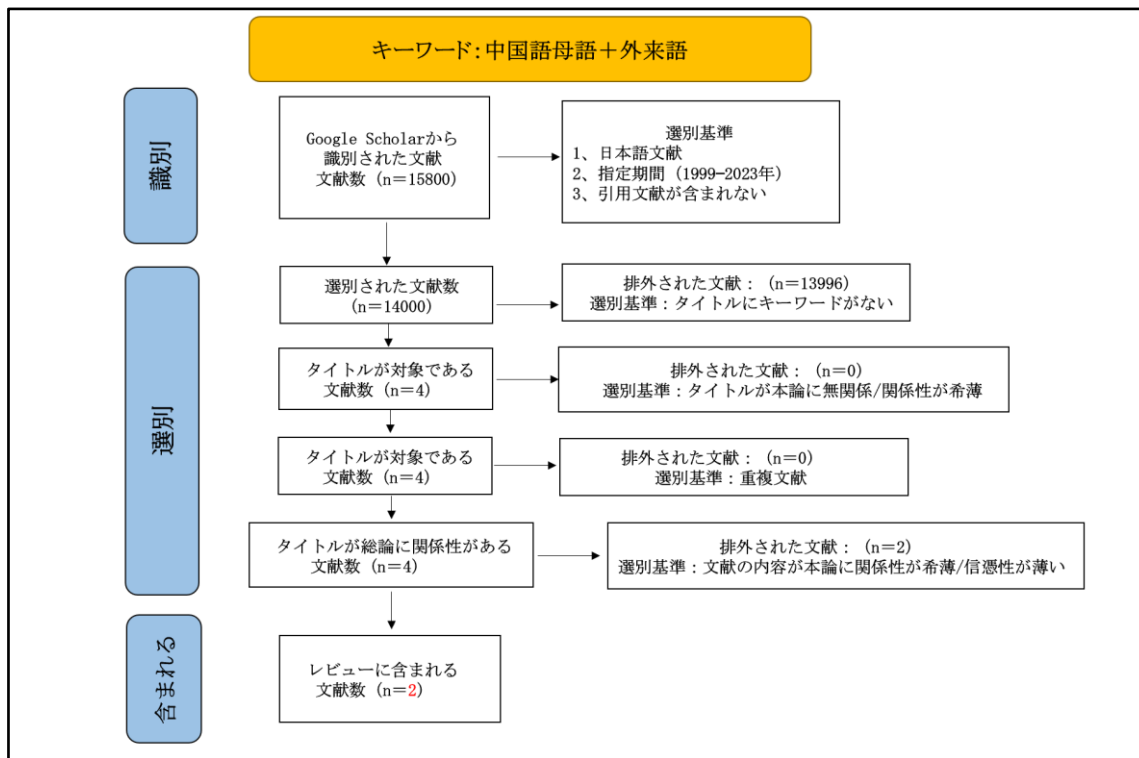
2024年1月1日時点で、文献選別の結果は、図11～図20の通りである。(選別された後、総説に含まれた文献数は0である場合、略された)合わせて35編である。



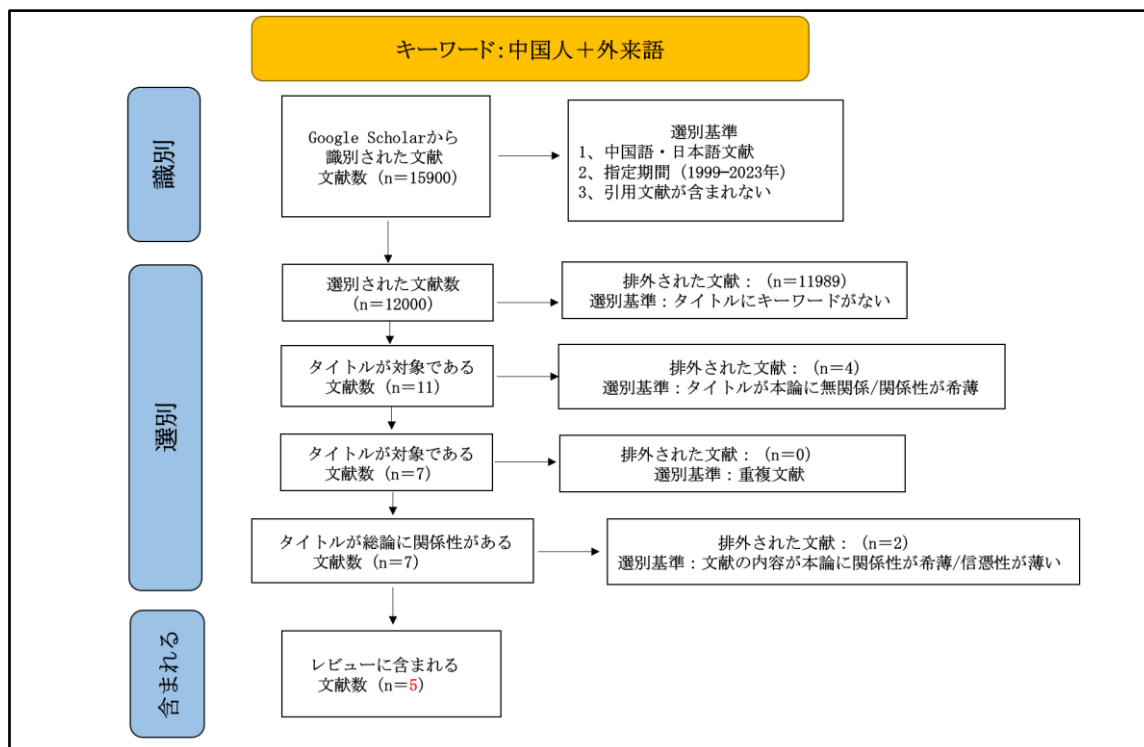
(図11) Google Scholar—中国語母語+カタカナ



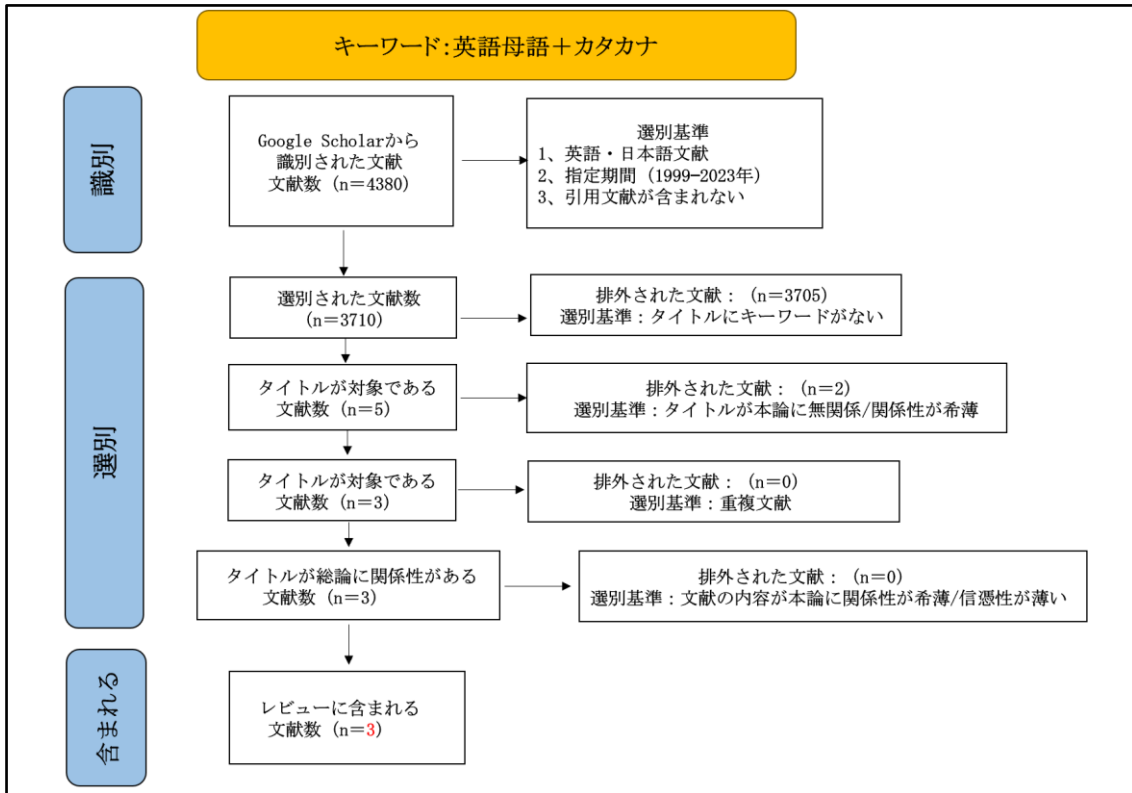
(図12) Google Scholar—中国人+カタカナ



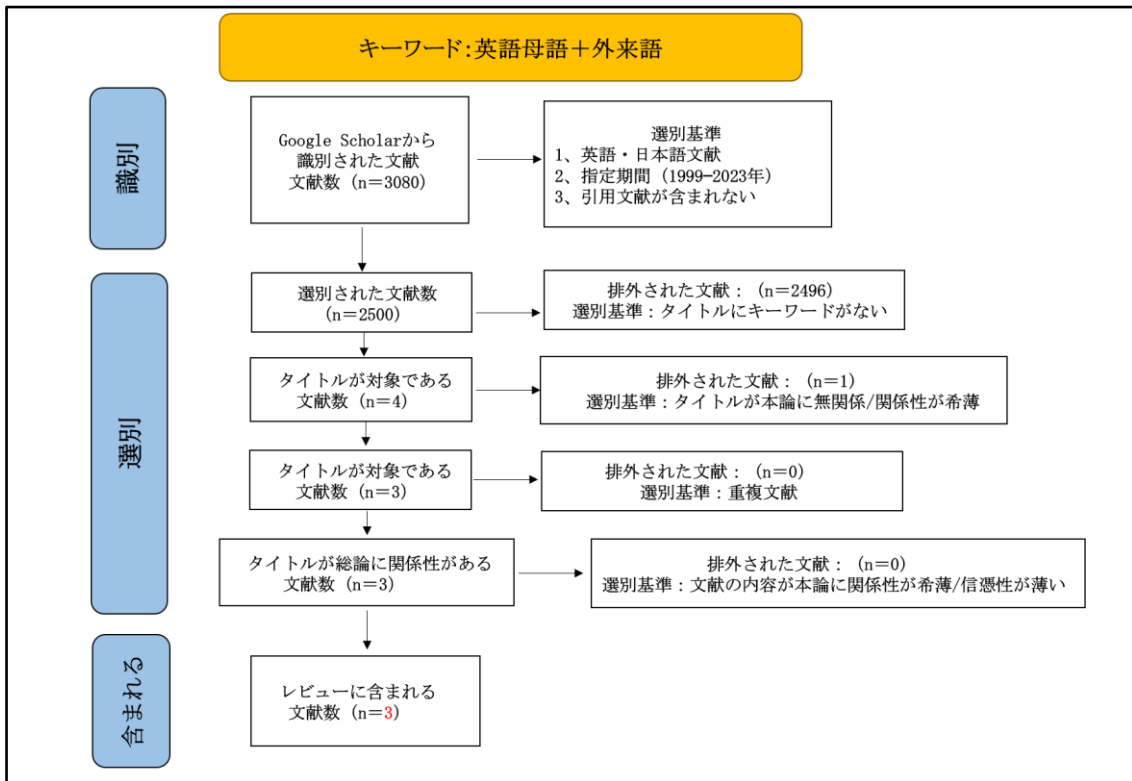
(図 13) Google Scholar—中国語母語 + 外来語



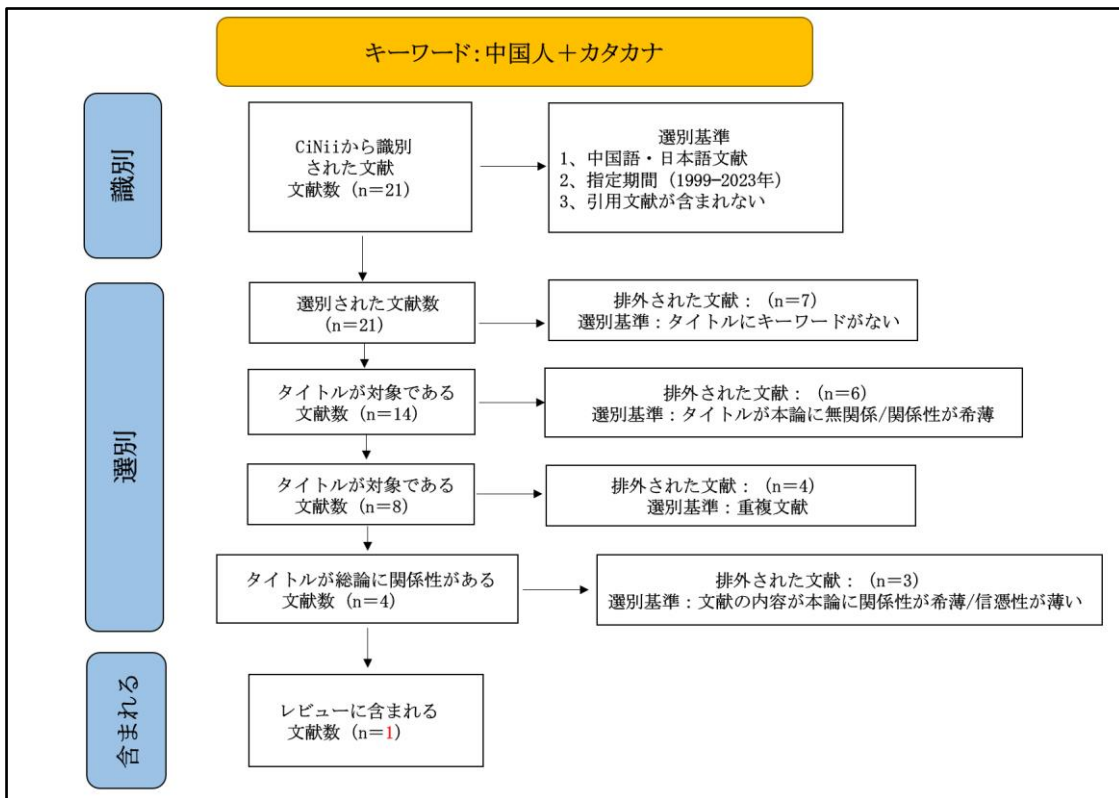
(図 14) Google Scholar—中国人 + 外来語



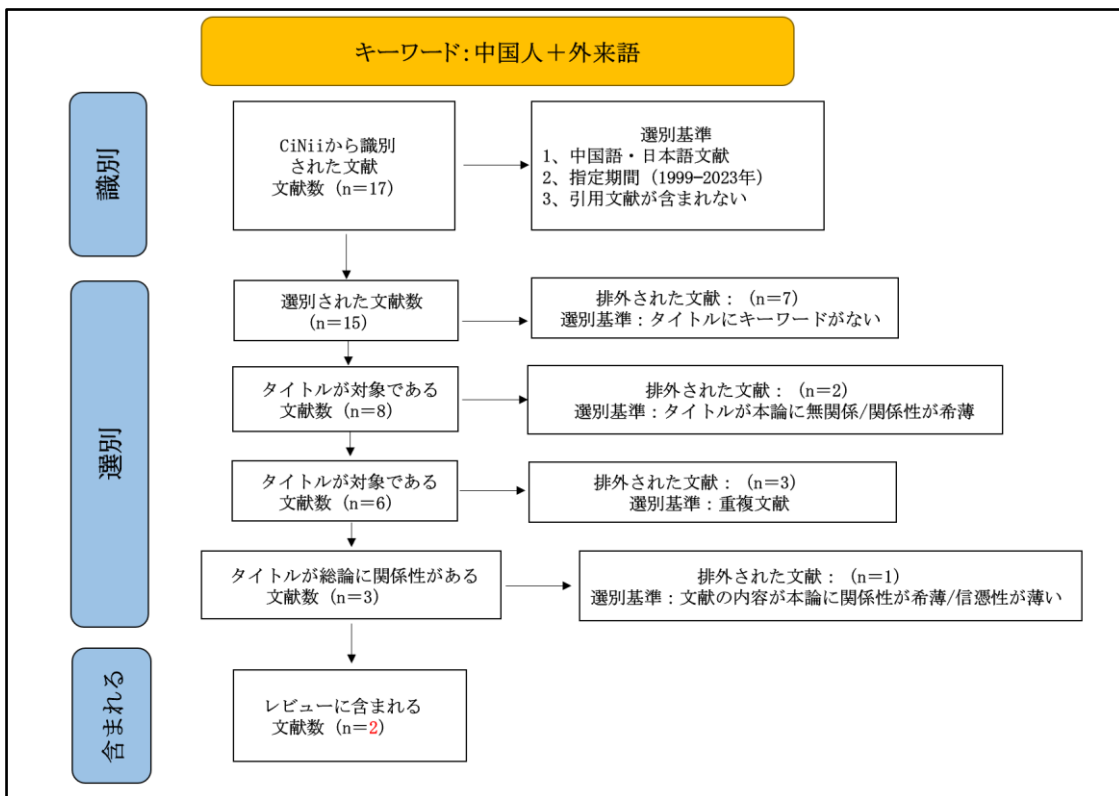
(図 15) Google Scholar—英語母語 + カタカナ



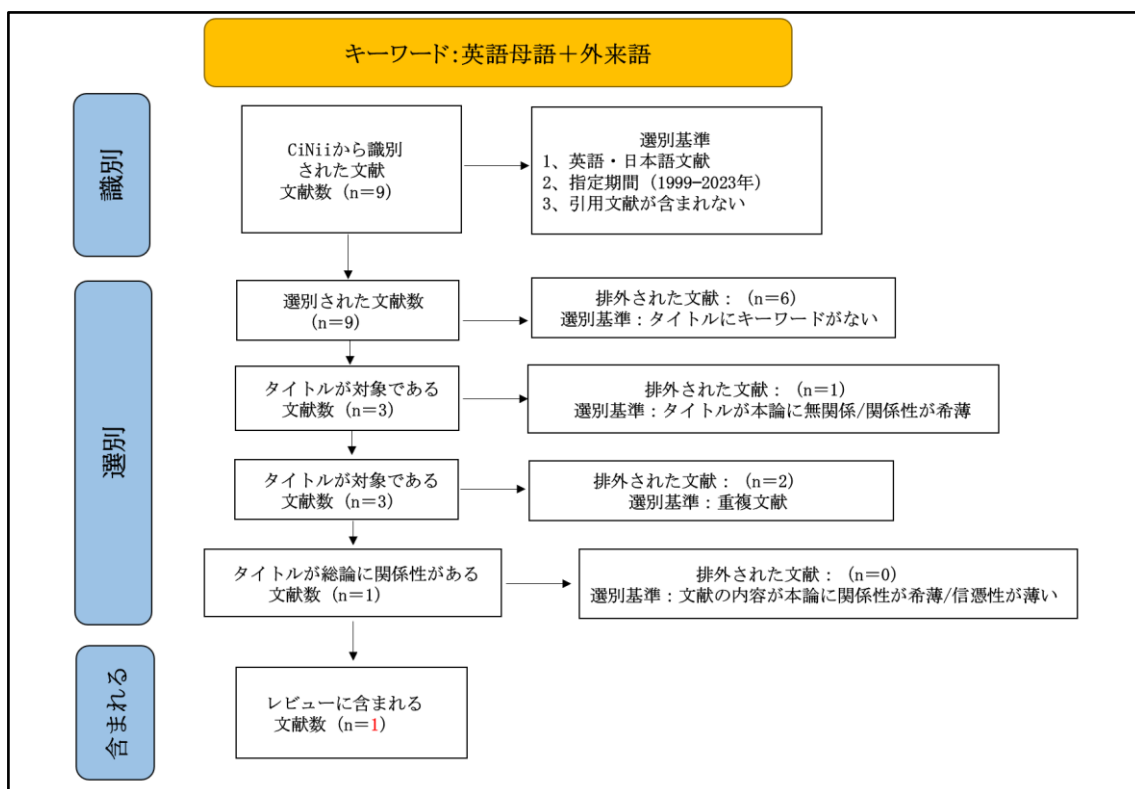
(図 16) Google Scholar—英語母語 + 外来語



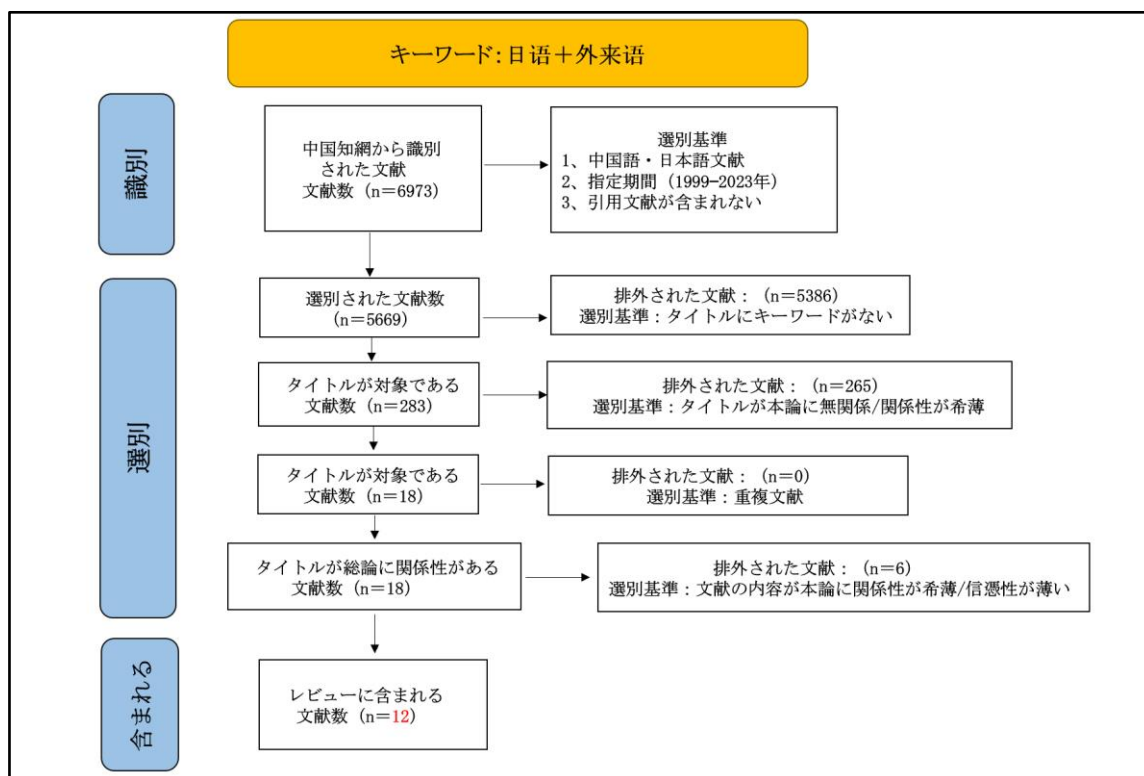
(図 17) CiNii-中国人+カタカナ



(図 18) CiNii-中国人+外来語



(図 19) CiNii—英語母語 + 外来語



(図 20) 中国知網—日語 + 外来語 (日本語 + 外来語)

文献選別の結果からみると、特に中国語母語話者や英語母語話者に着目しているカタカナ語習得・教育の研究が非常に少ないことが分かった。数万編の文献から35編しか選出されなかった。その原因として、母語が異なる日本語学習者はカタカナ語の学習過程において、共通する問題があると言えるか。実はキーワードを「日本語教育+カタカナ」や「日本語教育+外来語」にして、上述のフローで選別を行ってみても、同じように選出された文献の数がごく少ないと見られる。

従って、カタカナ語習得・教育、さらにカタカナ語習得・教育における母語影響は日本語教育の一部として言及されたことは多いが、本格的に研究されていないようである。特に「J-STAGE」、「国立教育政策研究所教育研究情報データベース」と「国立国語研究所学術情報リポジトリ」の中から選出された文献の数が予想外の「0」である。国立研究機関が運営しているデータベースとして、収録された資料が厳選されたこと、および本論の文献選別が厳しすぎるものが原因であると考えられる。

それに対して、「中国知網」と「Google Scholar」から選出された文献が多い原因として、中国人日本語学習者の数が多いので、中国では日本語習得・教育の各方面が重視されていることが考えられる。一方、「Google Scholar」に収録された文献が幅広く、多岐にわたっているため、キーワードが厳しく限定されても数多くの文献が選別できる。それに、中国語母語話者に比べ、英語母語話者のカタカナ語習得・教育に注目している研究がごく少ない現象について、日本語学習者の人数が比較的少ないことが主な原因であると考えられる。

第3章 中国語母語話者のカタカナ語習得

上述の文献収集方法で選り出された先行研究に基づき、本章は「中国語母語話者のカタカナ語認識の傾向」、「習得過程における問題点」と「中国語母語話者向けのカタカナ語教育」の3つの面から、中国語母語話者のカタカナ語習得実態を解明する。

3.1 カタカナ語認識の傾向

中国語母語話者がカタカナ語の習得過程において、どのような認識傾向を示しているのかを明らかにするために、本節では「カタカナ語に対する認識実態」、「認識過程における母語知識影響」、「認識過程における英語知識影響」と「カタカナ語に対する学習戦略」の4つの面から、中国語母語話者のカタカナ語認識の傾向を考察する。

3.1.1 カタカナ語に対する意識

山下等(2013)は日本国内の大学や日本語学校に在籍している母語が中国語であり、日本語は中・上級レベル（日本語能力試験 N2 レベル修了程度もしくは、それ以上）である日本語学習者44名（男性22名、女性22名）を対象として、カタカナ語に対する意識を調査した結果が以下の通りである。

難しさについては、「カタカナ語は難しい」という問いには「とてもそう思う」「そう思う」あわせて30名（68.2%）であった。「書く」「聞く」「読む」「発音」の技能別の難しさに関しては、「とてもそう思う」と「そう思う」あわせて、聞く24名（54.5%）>書く21名（47.7%）>読む20名（45.5%）>発音16名（36.4%）であった。カタカナ語に難しさを感じており、特に聞くことに苦手意識を持つ学習者は半数以上いる。自由記述でも「覚えにくいし、聞き取りにくい」、「英語で読んだら意味がわかるけど、日本人の独特な発音に転換したカタカナはよくわからない」、「正しく書くのが難しい」などのコメントがあった。中国語母語話者にとって、漢字表記できる語は音を正確に把握していなくても、文脈から意味を類推し、正しい漢字を表記することが可能である。一方、カタカナ語は表音文字であり、音を正確に把握していなければ書けないため、難しさが顕著に現れるものと思われる。

次に、カタカナの使用や学習に関する問いについて、「カタカナ語は面白い」について、「思う」（「とてもそう思う」と「そう思う」）7名（15.9%）に対し、「思わない」（「全くそう思わない」と「そう思わない」）23名（52.3%）である。「日本語でカタカナ語が使われることは好ましい」について、「思う」11名（25.0%）、「思わない」19名（43.2%）である。「カタカナ語をできるだけ使いたい」について、「思う」6名

(13.6%)、「思わない」24名(54.5%)である。自由記述でも、「日本語で意味を表せる言葉もあるのになぜ外来語を混ぜて話すかまったく分らない」、「英語でもないし日本語でもないし、中途半端な感じがする」などカタカナ語に対して否定的な意見が見られる。

「自分話す時はあまりカタカナ語使わない」、「発音が難しいので、一般的に他の人と話すのが恐怖感を感じる。相手に通じない」など、カタカナ語を使わないと思われる意見もあった。

しかし、「これからも日本語でカタカナ語が増えることは好ましい」という問いに対し、「思う」と回答した人が15名(34.1%)いるのに対し、「思わない」と回答した人も同様に15名いる。また、「日本語は生きているものである。新しい言葉が出たり、古い言葉が使わなくなったりするのが理解できる」という意見もあり、カタカナ語の増加がある程度で中国語母語話者の学習者に容認されていることが分かった。

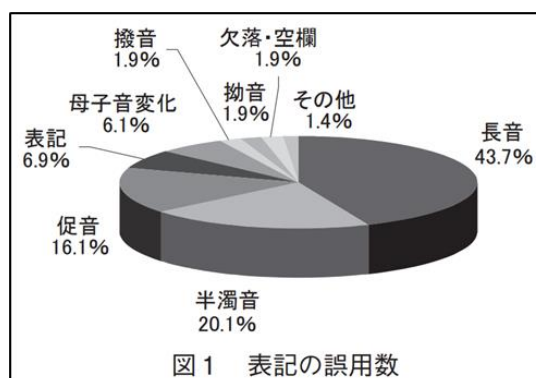
それに、「日本語を学習する上でカタカナ語は重要である」には30名(68.2%)が「思う」と答えた。一方、これまでのカタカナ語学習に関して「十分である」と答えたのは5名(11.4%)である。その結果、「カタカナ語を教えてほしい」31名(70.5%)と指導に対する要望が高い。自由記述でも、「外来語・カタカナ語ができたときに、その実用性はすごく大きいと思う」、「もし、日本語をマスターするならば、外来語を勉強することは欠かせない」というコメントが見られる。調査対象者は日本で生活しており、日々カタカナ語に接触することも多く、その必要性を感じているようである。(山下等, 2013: 46-47)

その上、(山下等, 2013)は上記の対象者に対して、聞き取りテストを行い、テストの結果がカタカナ語に対する意識や学習者の背景と関連性を持つかどうか考察した。

聞き取りテストは、カタカナ語25語を選定し、それらのカタカナ語を2回ずつ読みあげたCDを聞いてシートに書かせて、その意味も母語である中国語あるいは英語で答えさせた。それに、データから誤答を採取した。誤用を15の基準に分類し集計した。(図21) その結果、表記に関しては正答率65.2%、全誤用数は627である。各種類の誤用の割合が以下の通りである。(図22) (山下等, 2013: 43)

	基準	誤用例 (正答)		基準	誤用例 (正答)
1	長音欠落	コーヒ (コーヒー)	9	(半)濁音欠落	ホケット (ポケット)
2	長音挿入	ポケットー (ポケット)	10	(半)濁音挿入	メードル (メートル)
3	促音欠落	スリバ (スリッパ)	11	母音変化	スポーン (スプーン)
4	促音挿入	シャッツ (シャツ)	12	子音変化	ストーグ (ストーブ)
5	拗音欠落	ニース (ニュース)	13	表記	シャワー (シャワー)
6	拗音挿入	ティーブル (テーブル)	14	欠落・空欄	
7	撥音欠落	スプー (スプーン)	15	その他	
8	撥音挿入	プログラムム (プログラム)			

(図21) 誤用の分類



(図 22) 表記の誤用数

テスト結果と意識調査結果との相関関係を見て、その結果、発音の難しさと表記、読みの難しさと表記は弱い相関（相関係数 $r = 0.36$, $r = 0.30$ ）である。日本語学習歴と表記は弱い負の相関（ $r = -0.37$ ）が見られる。表記は、発音や読みに難しさを感じるほど誤用が多く、日本語学習が長いほど正確になるようである。一方、英語学習歴は意味理解にのみ弱い負の相関（ $r = -0.35$ ）が見られる。英語学習歴が長いほど意味の理解度は高いが、必ずしも正確に書けるわけではないとは言える。（山下等，2013：46-47）

田島・金(2011) は2010年9月から12月にかけて、愛知学院大学文学部2、3年生(日本語母語話者) 84名と北京第二外国語大学、上海外国語大学・華南理工大学・広東外語外貿大学・華南師範大学の日本語学科3、4年生(中国語母語話者) 169名を対象として、外来語の認知度(語彙の理解度)について、アンケート調査を行った。

アンケート調査の内容は学術論文専門用語、新聞記事用語、一般文章用語、ホームページ用語、グルメ用語などに分けて認知度(意味の理解度)をはかった上、外来語の増加における認識について、いくつかの質問事項を加えた。(田島・金，2011：134)

結果として、「学術文献による外来語の理解度は、母語話者も学習者も低いことが明らかになった。新聞記事による外来語は、学習者にとってはかなり難しいので、その理解度も低い。また、新聞記事における外来語の理解度は母語話者と学習者間のばらつきが大きいことが今回の調査で分かった。一般文章における外来語について、母語話者に比べ、学習者の理解度ははるかに低いことが明らかになった。パーセントの差が40を超え、平均3割程度に止まっている。」

「しかし、ネット利用率がかなり高いといわれている日本語学習者のネット専門語以外の外来語の理解度も低く、「グルメ」など極く普通に使われている外来語もあまり知られていないことが判明した。見たことも食べたこともないグルメ用語を理解できない学習者が多いであろうから、なんとなくこの結果に納得しなければならないのではないかと思える。」(田島・金，2011：132-134)

それに、外来語の使用やその増加に対する学習者の認識を調査した結果(図23)、「日本

語学習者は日本語の外来語には非常に困難を感じるとともに、これ以上増え続けたいことを望んでいる。本来外国語の習得は難しいことであるのに、変化が激しい日本語の外来語はこれ以上増えたいことを望んでいる学習者が大多数であることが分かった。」(田島・金, 2011 : 131)

問1	日本語の外来語の習得はどうか。 人 (%)		
	難しい 117 (69)	易しい 2 (1)	難しくも易しくもない 48 (28)
問2	日本語の外来語が増加していることを知っていますか。		
	知っている 133 (79)	知らない 34 (20)	
問3	日本語の外来語の増加についてどう思いますか。		
	いいと思う 56 (33)	よくない 111 (66)	
問4	外来語より日本語のほうが覚えやすいと思いますか。		
	はい 111 (66)	いいえ 56 (33)	
問5	日本語の外来語がどんどん増えていくことを望んでいますか。		
	望んでいる 28 (17)	望まない 139 (82)	

(図 23) 外来語認識

時(2017)は2015年3月に、大連にある2つの大学の日本語専攻学生129人を対象として、外来語意識について、アンケート調査を行った。日本語能力テストの成績がない対象者を除き、100人の対象者から有効なデータをもたらした。(時, 2017 : 174, 筆者訳)

調査結果として、「外来語が非常に難しい」は「賛成」や「非常に賛成」を回答した人は62%を占め、多数とは言える。「外来語が読みにくい」について、「賛成」や「非常に賛成」を回答した人は合わせて38%で、少数である。「覚えにくい」について、「賛成」や「非常に賛成」を回答した人は全員の60%を占め、半数以上である。「使いにくい」は、「賛成」や「非常に賛成」を回答した人は42%で、半数近い。「発音しにくい」について、46%の人が「賛成」や「非常に賛成」を回答し、半数近い。「聞きにくい」の項目で、66%の人が「賛成」や「非常に賛成」を回答し、多数である。「使用したい」について、僅か29%の人が賛成し、全数の三分の一にも足りなかった。

収集したデータに基づき、時(2017)はT検定を行った。分析結果からみると、聞き取りが中国語母語話者の外来語学習の弱点であり、対象者全体の外来語苦手意識が分かった。外来語の使用を好まない傾向も明らかになった。(図 24)(時, 2017 : 175, 筆者訳)

表 1 全体的傾向 (全体的な傾向)

問題項目(質問項目)	M	SD
外来語很难(外来語が難しい)	3.60	1.054
不易阅读(読みにくい)	2.99	1.210
不易记住(覚えにくい)	3.64	1.069
不易使用(使いにくい)	3.24	0.955
不易发音(発音しにくい)	3.30	0.959
不易听懂(聞き取りにくい)	3.69	1.002
想要使用外来語(使いたい)	2.91	1.045

注：“M”为平均值。“SD”为标准偏差。

(図 24) 外来語意識

鄧(2018)は様々な習熟度段階にある中国語母語話者の外来語の使用実態を明らかにするために、大規模な日本語学習者コーパス(多言語母語の日本語学習者横断コーパス：I-JAS)を利用した。また、比較対象として、韓国語・英語母語話者、及び日本語母語話者のデータにも注目した。(鄧, 2018 : 245)

具体的な方法は、外来語使用の基礎的指標として、延べ語数、異なり語数、語彙レベル、誤用数、上位語の5点に着目し、研究問題を設定し、データを分析する。

その分析結果として、「外来語使用に関して、①中国語母語話者は外来語のなじみの少なさが注意深い外来語使用に繋がり、結果として日本語母語話者と相対的に類似した外来語使用パターンを示していること。②中国語母語話者の使用傾向は多くの点で他の母語話者とも共通するものの、全体として外来語使用を回避し、真に自信のあるものしか使用しないため、誤用がほとんどないこと。③中国語母語話者の外来語使用は、上位語の一致率の高さと語彙レベルの高さという点によって他の学習者とは区別されること、また、習熟度の上昇に伴う変化の大きさについて、他の母語話者に比べ、比較的小さいことが分かった。」(鄧, 2018 : 261)

志村(2014)はJSL(Japanese as a Second Language)学習者のカタカナ語の表記発達過程を解明するために、2011年10月に来日し、日本国内の日本語学校に通っていた中国からの日本での学習を始めて1ヶ月目の初級学習者である留学生21名を調査対象として、下記の三種類のテストを用いて、表記の変化を考察した。

1、音声刺激を受けずに、視覚のみで単語を認知し表記に変換するテスト。

- ①絵を見て答えをカタカナで書く【Pテスト】
- 2、単語の音のみを聞いて表記に変換するテスト。
 - ②単語を聞いて答えをカタカナで書く【Lテスト】
- 3、視覚・聴覚・文章からの推測を通して表記に変換するテスト。
 - ③問題文を聞いて、絵を見て答えをカタカナで書く【PLテスト】(志村, 2014 : 55)

調査期間を日本での学習開始からの1年間として、4回のテストを実施した。テストは3種類で問題数は各12問とした。テストに使用した単語は、教材として学校で使用されている『みんなの日本語初級I本冊』からの既習語12語を用いた。

三種類のテストから得られた結果を分析すると、「既習語12語を次のABCのグループに分類することが出来た。Aグループ：徐々に習得の進んだ単語。Bグループ：最後まで表記の安定しなかった単語。Cグループ：1回目のテストで多くの学習者が正しく表記できたが、2・3回目のテストで誤りが増加し、4回目のテストで再び正しく書けるようになるというUカーブの推移が見られる単語。」(志村, 2014 : 56-57)

そして、「ABCグループの単語を比較すると、習得が比較的順調に進んだAグループの単語は、日常で学習者自身がよく使っている単語であることに気づいた。教室活動だけではなく、日常生活と直結した単語であり、学習者にとっては関わりの強い言葉である。それに、Bグループの単語は学習者に確認したところ、教科書での記述も少ないし、教室活動での使用も少ないだけではなく、生活面でのインプットも少ない言葉である。最後、Uカーブの見られるCグループの単語は、授業では多く使用されているが、学習者の日常生活に直接に関係したものではなく、あくまで教室活動の一部であり、個人差はあるにしてもAグループの単語ほど自分にとって密接とは言えない。」(志村, 2014 : 66-67)

「以上の結果を踏まえ、中国語母語話者のカタカナ語の表記習得過程は一定のものではなく、単語によっても違いがあり、また学習時間の経過とともに必ず習得が進むとは限らないことがわかった。」(志村, 2014 : 67)

3.1.2 認識過程における母語知識影響

「中国語では英語由来の外来語を受容するとき、大半は原語の発音が連想しにくい漢字表記語となった。それゆえ、中国人日本語学習者が日本語の外来語を理解しようとするとき、中国語の知識を援用することは難しい」と大和等(2010)は指摘している。

大和等(2010)は中国人日本語学習者の学習期間が日本語の外来語および漢字語の処理にどのように影響しているかを考察するために、「外来語の語彙処理」と「漢字語の処理」の2つの実験を行い、処理の迅速さと正確さを比較した。

実験対象は2009年9月に天津市内の大学で日本語を専攻した中国人日本語学習者127名である。実験参加者は学習期間の差により、日本語学習歴1年の「1年終了生」58名と日

本語学習歴2年の「2年終了生」69名の2グループに分類された。

実験方法については、反応速度測定用の実験ソフトである DMDX3.2.6.41 を用い、語彙性判断課題を被験者に課した。コンピュータの画面中央に1語ずつ計80語の語彙が提示され、その語が日本語の語彙としてあるかどうかをできるだけ速く、正確に判断してもらった。(大和等, 2010: 103)

2つの実験の結果は以下の通りである。

①実験1：外来語の語彙処理

処理の迅速さの比較(日本語母語話者5名の処理速度を基準として示す)：2(学年：1年・2年終了生)×2(高・低親密度語)の分散分析を行った。外来語の処理において学習者にとっての親密度の影響は非常に大きいことが分かった。それに、学習期間は外来語の迅速な処理に影響があることが分かった。(大和等, 2010: 106-107)

処理の正確さの比較：上述と同じ分散分析を行った。親密度が高い外来語が親密度の低い外来語より正確に処理できることが分かった。それに、1年終了生より2年終了生のほうが、正確に外来語が処理できることが分かった。(大和等, 2010: 108-109)

②実験2：漢字語の処理

処理の迅速さの比較(日本語母語話者5名の処理速度を基準として示す)：上述と同じ分散分析を行った。親密度が高い漢字語のほうが、親密度が低い漢字語より迅速に処理できることが分かった。それに、学習期間は処理の迅速さには影響を与えにくいことが分かったが、影響を受ける傾向がある。(大和等, 2010: 112)

処理の正確さの比較：上述と同じ分散分析を行った。高親密度漢字語の誤答率は1年終了生および2年終了生とも低いものの、一方の低親密度漢字語の誤答率は高いことも分かった。それに、日本語にも中国語にも存在しない日本語表記非語の処理は、日本語では実在しないが、中国語では存在する語の処理より正確にできることが分かった。しかし、学習期間の影響があまり見られない。(大和等, 2010: 113)

結論としては、漢字語の処理に関して、中国語を母語としていることのメリットは、漢字の形態表象群を迅速に活性化し、日本語の漢字表記語の処理にも活用できることである。一方、外来語の処理時間に関して、2つのグループの対象者全員は日本語母語話者に比べ、大幅に長い時間を要していたことが分かった。学習期間の影響について、学習期間が長くなると、外来語と漢字語共に、処理が迅速になり、正答率が向上することが分かった。その原因は、日本語学習が進むと共に、日本語の語彙知識が増加し、低親密度語の学習も進むことにより、多様な語彙を効率的に処理できるようになったことが考えられる。(大和等, 2010: 114-115)

大和・玉岡(2011)は中国語母語話者が日本語テキストのオンライン読みにおける漢字表記語と片仮名表記語の処理過程を考察するために、日本の大学・大学院に在籍する中国人日

本語学習者 51 名(男性 18 名、女性 33 名)を対象として、固定窓の自己制御読み(fixed-window self-paced reading)課題を課した。

調査対象者に全般的な日本語の語彙テストを課した結果により、一部の対象者を除外し、上位群に区分された対象者は 21 名、下位群に区分された対象者は 18 名となった。

調査方法はモニターの中央に 1 語ずつ提示された語を調査対象者が自分のペースで読ませ、処理速度を測る方法である。使用したテキストは漢字表記語を多く含むテキスト 2 種類と片仮名表記語を多く含むテキスト 2 種類である。(大和・玉岡, 2011 : 75-76)

結果として、「漢字表記語を多く含むテキストの場合は、日本語の語彙知識の豊富さと漢字表記語彙を中心とするテキストの処理速度には関連性がないことが分かった。その原因として被験者母語の中国語の影響があると考えられる。」(大和・玉岡, 2011 : 77)「片仮名表記語を多く含むテキストの場合は、上述のテキストに比べ、上位群・下位群ともに 1 語あたりの平均読み時間が長くなっているだけでなく、上位群と下位群の読み時間に有意な差のある語が多い。」(大和・玉岡, 2011 : 79)

結論としては、「中国人日本語学習者にとって漢字が中国語と同じ書字であるという点で、中国語で既に持っている漢字の知識を援用し、漢字表記語全体の処理を行っている。」と指摘している。「一方、母語の書字と異なる片仮名表記語を含むテキストの読み処理において、語彙知識が読みの迅速さに重要な役割を果たす。」と考察している。(大和・玉岡, 2011 : 82-83)

玉岡(2018)は中国人日本語学習者による L3(第 3 言語)日本語の外来語処理における L1(第 1 言語)中国語と L2(第 2 言語)英語の影響を考察し、3 言語間の語彙的な相互活性化による促進効果を解明するために、日本の大学で日本語を学習していた中国語母語話者大学生・大学院生・研究生 41 名(女性 33 名、男性 8 名)を対象として、プライミング実験を実施した。(玉岡, 2018 : 21)

実験方法は、DMDX3.2.6.4 の実験ソフトを用いて、対象者に対し、L2 の英単語とそれらを意識・音訳した L1 中国語の訳語をプライム刺激語として先行提示し、ターゲット刺激語と同じ L2 英語から借用した L3 日本語の外来語の語彙性判断課題への効果を測定した。(玉岡, 2018 : 17)

結果として、L3 日本語の外来語を処理する際に、L2 英語とそれらの L1 中国語の訳語両方とも、処理速度に促進効果が見られる。それに、L3 の外来語の親密度が高い場合に、L2 英語より、L1 中国語の訳語を先行提示したほうがより強い促進効果が見られる。一方、親密度が低い場合は、L2 英語と L1 中国語の両言語が L3 日本語の外来語の処理を同じ程度で促進した。さらに、L1 の意識に比べ、L1 の音訳のほうがより大きいプライミング効果が見られる。(玉岡, 2018 : 29)

3.1.3 認識過程における英語知識影響

大和・玉岡(2013)は語彙知識が外来語を多く含むテキストの読みにどう影響するかを考察し、英単語の語彙処理、外来語の語彙処理および外来語を多く含むテキストの読み処理の因果関係を解明するために、日本の大学・大学院に在籍した中国人日本語学習者 51 名(男性 18 名、女性 33 名)を対象として、語彙処理速度の測定実験を行った。

調査対象者に対し、日本語の一般的な語彙知識のテストを行った結果により、対象者を数名除外し、上位群に区分された対象者は 21 名、下位群に区分された対象者は 18 名となった。ただし、語彙処理と読みの関連性を調べるパス解析では、調査対象 51 名全員を対象とした。(大和・玉岡, 2013 : 6-7)

実験方法は、反応速度を測定することができるコンピュータソフト DMDX3.2.6.4 を使用し、コンピュータの画面中央に 1 語ずつ提示された語を調査対象者が自分のペースで読ませ、処理速度を測る方法である。(大和・玉岡, 2013 : 20)

結果として、「外来語の語彙処理と外来語を多く含むテキストの読み速度は、処理の迅速さと正確さの両面で日本語の語彙知識の影響を受けることが分かった。それに、英単語の語彙処理の迅速さと外来語の語彙処理の迅速さの間には強い因果関係が見られる。これは、英語を日本語に借用する際に、音訳されることが多い日本語外来語の語彙処理には、英単語の語彙処理能力が強く影響していることを意味する。さらに、外来語の語彙処理の迅速さと外来語を多く含むテキストの読み速度の間にも強い因果関係が見られる。最後に、英単語の処理速度は、外来語を多く含むテキストの読み処理に直接的な因果関係はないものの、英単語の語彙処理は、外来語の語彙処理を介して日本語の外来語を多く含むテキストの読みに間接的に影響していることが明らかになった。」(大和・玉岡, 2013 : 29-31)

徐(2016)は CNS(中国語を母語とする日本語学習者)の外来語における特殊拍の聞き取りと産出の際に、特定の傾向はあるか、さらに英語の語彙知識がヒントとして用いられているかを考察するために、英語(L2)と日本語(L3)を学習した経験を有している中国人日本語学習者 64 名(男性 16 名、女性 48 名)を対象として、有意味語と無意味綴りの刺激語を用いて、聞き取りテスト・産出テストを行い、フォローアップインタビューも行った。

調査対象者は、日本語学習期間により、下位群・中位群・上位群に分類された。下位群 21 名は日本語学習歴が 3 ヶ月以上 6 ヶ月未満で、中位群 22 名は日本語学習歴が 6 ヶ月以上 2 年未満で、上位群 21 名は日本語学習歴が 2 年以上で、日本語能力試験 N1 に合格した。(徐, 2016 : 02-13)

調査の結果は、以下の 3 つの面から述べられた。

第 1 に、聞き取りでは、学習期間による差と有意味語・無意味綴りによる差が見られる。CNS は日本語の外来語における特殊拍を聞き取る際に、英語の語彙知識はヒントとして用いていることが明らかになった。さらに、学習期間の上位群にとって、英語の語彙知識が正の影響を与えやすい。最後に、誤表記の特定傾向について、欠落の間違いパターンが最も多い

ことも分かった。

第2に、産出では、学習期間による差と有意味語・無意味綴りによる差も見られる。CNSは日本語の外来語における特殊拍を産出する際に、英語の語彙知識はヒントとして用いていることが明らかになった。さらに、産出の際に、英語の語彙知識は早い段階で既にCNSに影響を与えていると考えられる。最後に、産出における特殊拍の間違いの傾向について、聞き取りと一緒に、欠落の間違いパターンが最も多いことも分かった。

第3に、調査対象者の内省から、CNSは日本語の外来語を習得する際に、英語の語彙知識を援用していることが分かった。特に、特殊拍の部分に関しては、英語の語彙知識を援用する調査対象者は、形態的知識を多用していることが明らかになった。(徐、2016:39)

馮(2021)は英語由来の日本語外来語に着目し、それに対する中国人日本語学習者の認知傾向を明らかにするために、中国の大学・高校・日本留学機構に在籍していた合計285名の中国人日本語学習者を対象として、理解度・認知傾向のアンケート調査を行った。

アンケート調査に使用された外来語は、難易度を考慮し、多言語母語の日本語学習者横断コーパス：I-JASから抽出した16語(特殊拍を含む外来語8語と特殊拍を含まない外来語8語)である。

結果としては、「外来語の認知は単一の方法で行う中国人日本語学習者が多いことが分かった。また、日本語力に対する英語力の相対位置が高ければ高いほど、英語の話彙知識を援用する傾向があることが分かった。それに、対象者の回答をみると、語彙レベルの正の転移に対して、「第二言語(英語)から第三言語(日本語)への転移」と「第三言語(日本語)から第二言語(英語)への転移」のどちらにも肯定的な態度をとった人が多い。」(馮, 2021:176-177)

3.1.4 カタカナ語に対する学習策略

周(2011)は2010年4月に中国人日本語学習者の外来語学習策略について、アンケート調査を行った。

調査対象は「一本学生＝上位大学学生」と「三本学生＝下位大学学生」の2つのグループに分けられた。具体的に、浙江工商大学日本語言文化学部日本語専攻2年生(一本学生)42名、および浙江工商大学杭州商学院日本語専攻2年生(三本学生)44名、合計86人である。(周, 2011:28, 筆者訳)

調査方法は、アンケートの各質問に対し、「常に使う」、「比較的によく使う」、「時々使う」、「ほとんど使わない」と「全く使わない」の5つの選択肢を設定し、得点をそれぞれ5、4、3、2、1とした。そして、収集したデータに基づき、統計ソフトSPSS 13.0を使用し、調査対象の学習策略と2つのグループの差について、分析を行った。(周, 2011:29, 筆者訳)

結果として、「メタ認知策略」、「認知策略」と「社会的・情緒的な策略」の3つのカテゴ

リーからみると、平均値が4以上の策略が4つあり、高い順に「辞書を調べる」、「英語知識から単語の意味を推測する」、「エラーを見つけて訂正する」、「特に頻繁に出る単語に注意し、記憶する」である。平均値が最も低い策略は、それぞれ「学習計画を作成する」、「単語を意味に基づいて分類する」、「語彙練習問題を解く」、「こつを見つけて単語を記憶する」、「クラスメートと協力して学習する」の5つの策略である。「多種類の外来語学習策略が使われていることが分かった。」(図25)

策略 大类	策略 小类	策略的具体内容	三本 平均值	一本 平均值	整体平均值	
元 认知 策略	选择性 注意	1 特别注意并记忆老师强调的,或是你认为重要的 单词	3.9091	3.8571	3.8837	3.9535
		2 特别注意并记忆常出现的单词	4.1364	3.9048	4.0233	
	计划	3 制定学习计划,如规定自己每天或每周要背多少 个单词(包括外来语)等	2.8409	2.2143	2.5349	3.5310
		4 复习学过的单词	3.5000	3.3095	3.4070	
	自我 监控	5 当读错或写错单词时,我会及时寻找正确答案、 纠正错误	4.0909	3.9762	4.0349	3.5310
		6 反思自己的词汇学习方法,若效果不好,会换一 种方法	3.2273	3.0714	3.1512	
	评价	7 对单词学习效果或成绩进行分析总结	3.1136	2.9048	3.0116	
机械 记忆	8 反复朗读单词	3.9773	3.7381	3.8605	3.7946	
	9 反复书写单词	4.0909	3.7857	3.9419		
	10 边读边写单词	3.6136	3.5476	3.5814		
结构 归类	11 把单词按照意思分类,帮助记忆	2.8182	2.5714	2.6977	2.7267	
	12 把单词按照词性分类,帮助记忆	2.8409	2.6667	2.7558		
认知 策略	上下文	13 通过记固定搭配来记单词	3.3409	3.2381	3.2907	3.2791
		14 通过记句子或课文来记单词	3.4545	3.3333	3.3953	
	猜测	15 通过阅读、听歌或看日剧等手段扩大词汇量, 从中记忆单词(包括外来语)	3.1136	3.1905	3.1512	3.6938
		16 根据上下文猜测词义	3.5455	3.4048	3.4767	
	查字典	17 根据句子的结构或意思猜测词义	3.6364	3.3095	3.4767	3.6938
		18 根据英语的发音、词义来猜测外来语的意思	4.1818	4.0714	4.1279	
	活用	19 通过查字典(包括电子辞典、网络辞典等)了 解单词的音调、意义和用法	4.3864	3.9524	4.1744	2.7500
		20 找词汇练习来做	2.5682	2.5000	2.5349	
	推理	21 通过实际说日语或写日语,来帮助自己掌握 单词	3.0455	2.8810	2.9651	2.9496
		22 寻找单词的规律,根据规律记忆	3.2727	3.1905	3.2326	
23 通过谐音、顺口溜等小窍门帮助自己记忆单词		2.6818	2.3571	2.5233		
联想	24 将新的单词与已有的语言知识联系起来,促进 记忆	3.3864	3.1429	3.2674	2.9496	
	25 利用同义词、反义词来记忆单词	3.2273	2.8810	3.0581		
策略 大类	策略 小类	策略的具体内容	三本 平均值	一本 平均值	整体平均值	
社会 及 情感 策略	社会	26 和同学等合作学习,帮助记忆单词	2.5000	2.3571	2.4302	2.7907
		27 在词汇学习上遇到不明白的地方时,向老师或 同学寻求进一步的解释	3.4091	2.8810	3.1512	
	情感	28 在单词的学习上自我激励	3.4091	3.2143	3.3140	

(图25) 外来語学习策略

それに、「一本学生と三本学生の外来語学習策略の使用に差があまり見られなかったので、学習者全員の努力と柔軟性が見られる。」(周, 2011 : 30, 筆者訳)

王(2009)は重慶大学の日本語専門の三年生 13 名、四年生 8 名、あわせて 21 人を対象として、外来語学習方略の予備調査を行い、対象者の外来語学習方法を調べた上、学習方略理論を導入し、外来語専用の学習方略を作成して、学習者の外来語学習方略を詳しく考察した。それに、テストを通して、学習者の学習成果を測定し、外来語学習における学習方略の使用と学習成果の関係についても考察した。

SPSS 分析ソフトウェアを利用し、分析した結果は以下の 4 つの研究課題について、それぞれ述べられた。

①学習者の外来語学習態度

平均値からみると、「英語の知識が外来語学習に役立てると思う」という項目の平均値が一番大きくて、4.36 である。この項目の標準偏差の値も 0.894 で、一番小さい。多数の学習者が外来語学習中の英語の働きを認めていると示した。次に「語彙学習に外来語が重要と思う」と回答する対象者も多く、外来語学習の重要性を意識している学習者が多数であることが分かった。(王, 2009 : 17)

②外来語学習方略の使用状況

調査は外来語学習方略を「メタ認知方略」、「認知方略」と「社会的・情緒的な方略」の 3 つのカテゴリーに設定した。そして、3 つのカテゴリーを 15 種類の方略に分け、それに 44 項目に分けた。(図 26) 3 つのカテゴリーを比較して、「認知方略」の平均値が一番高く、「社会的・情緒的な方略」の平均値が一番低い。

各カテゴリーの調査結果からみると、メタ認知方略には「自発的な学習」方略の平均値が一番高い。現在の学習者が自分なりの学習方略を身につけていることを示している。認知方略には「推測」方略の各項目の平均値と「辞書を利用する」の平均値が全部が高くて、3.80 以上である。

「社会的・情緒的な方略」において、「仲間と協力」方略と「自己激励」の 2 種類の方略の平均値とも 3 以下で、学習者が外来語を学習する時、この 2 種類の方略があまり使わないことを示している。

全体からみると、各学習方略の中、平均値が一番高く、よく使われている方略は「推測」方略である。「推測」方略に一番使われているのは「言語環境から意味を推測する」である。平均値が一番低くて、あまり使わないのはメタ認知方略の「計画」方略である。(王, 2009 : 19-21)

カテゴリー	項目	M	SD		
メタ認知方略	計画	計画を立てる	2.32	1.072	
		計画の進展を調べる	2.43	1.148	
	選択的注意	どの単語が重要で学ぶべきかを知ってる	3.27	1.086	
		日常に出た外来語を注意する	3.25	1.086	
	自発的な学習	適当に学習方法を変える	3.21	1.104	
		自分に相応しい語彙記憶方法を使う	3.51	1.020	
よく出るミス进行分析する		3.28	1.102		
評価	自分の成績をまとめたり、分析したりする	3.04	1.188		
認知方略	推測	文の構造から語の意味を推測する	3.91	0.954	
		言語環境から意味を推測する	4.07	0.935	
		トピックの知識を利用して推測する	3.94	0.874	
		外来語の発音から英語を連想して意味を推測する	3.89	1.118	
		推測から出る意味を原文返ってチェックする	3.80	1.035	
	辞書	辞書を調べる	3.90	0.870	
	文脈推論	新出単語に関する連語を覚える	3.51	2.163	
		新出単語に関する文を覚える	2.91	1.120	
		閲読中新出単語を覚える	3.03	1.096	
	ノートテイキング	重要と思う単語をノートに書く	3.39	1.171	
		同義語反義語一緒にノートに書く	2.91	1.303	
		原語の英語と言い換え語彙一緒にノートに書く	3.01	1.345	
	構造分類	発音より外来語を分類する	2.84	1.210	
		意味より分類する	2.55	1.072	
		原語より分類する	2.48	1.082	
		文法より分類する	2.58	1.213	
	語彙リスト	新出単語のリストを作る	2.78	1.183	
		知らない語なくなるまで語彙リストを復習する	2.84	1.140	
		習った語を定期的に復習する	2.90	1.241	
	認知方略	反復方略	繰り返して読む	3.35	1.264
			何回も書く	3.44	1.127
読みながら書く			3.40	1.228	
単語の意味解釈を何回も書く			2.55	1.311	
連想・関連		音韻連関規則を利用する	3.18	1.240	
		同義語と一緒に覚える	2.37	1.121	
		語彙を分類して一緒に覚える	2.63	1.209	
		発音の似ている単語を比べながら覚える	3.16	1.218	
		語彙を覚える時既知語彙を連想する	3.35	1.163	
		外来語を覚える時原語も覚える	3.31	1.234	
		英語を見る時外来語を連想する	2.81	1.184	
活用		練習問題で語彙を覚える	2.96	1.212	
		習ったばかりの外来語で文を作る	2.54	1.091	
		生活に外来語を活用する	2.95	1.198	
		実物から外来語単語と連想する	2.98	1.195	
社会的・情緒的な方略	仲間と協力	2.38	1.158		
	自己激励	2.86	1.204		

注：“M”が平均値である。“SD”が標準偏差である。

(図 26) 外来語学習方略

③ 外来語学習方略と学習成果の関係

外来語テスト得点により、対象者全員を「高得点」と「低得点」の2つのグループに分けた。この2つのグループの学習方略の使用状況を比べると、得点の高い学習者がよく使用する外来語学習方略は「選択的な注意」、「自発的な学習」、「推測」、「辞書利用」、「ノートテイキング」、「反復」、「連想・関連」と「自己激励」の方略である。一方、得点の低い学習者がよく使う方略は「推測」、「文脈利用」、「反復」方略である。あまり使用しない方略が「計画」、「連想・関連」方略である。

それに、「評価」と「連想・関連」の方略において、得点の高い組の平均値が明らかに高い。「構造分類」と「協力」の方略において、得点の低い組の平均値が明らかに高い。(王, 2009 : 25)

④ 英語と外来語学習の関係

日本語学習者が外来語を学習するとき、よく「外来語の発音から英語を連想して、意味を推測する」、「外来語を記憶する時、原語も覚える」などの英語と関連する方略を使用していることが分かった。英語と関連するこれらの方略は日本語学習者の外来語学習成績と正の相関を示している。

分析の結果からみると、「学習者の英語学習歴史」が学習者の英語と「外来語との転換規則の把握程度」と「英語の語彙量」に有意な相関を示している。「外来語との転換規則の把握程度」、「学習者の外来語の語彙量」と「学習者の英語の語彙量」がお互いに有意な相関を示している。どの方面から言っても、日本語学習者の外来語学習は英語の学力と緊密に繋がっている。(王, 2009 : 29)

3.2 習得過程における問題点

中国語母語話者がカタカナ語の習得過程において、様々な問題が存在している。本節では、それらの問題点を「カタカナ語自体の難点」、「カタカナ語回避現象」、「カタカナ語の誤用傾向」と「日本語教材の不足点」の4つのカテゴリーに分けて考察する。

3.2.1 カタカナ語自体の難点

唐(2007)は英語由来の外来語の習得過程において、中国語母語話者が出会った外来語の難点を3つの面から述べた。

① 外来語と英語原語との発音のズレは、日本語学習者、特に初心者にいくつかの困難をもたらす。具体的には、聞き取り、ディクテーション、朗読の練習において、誤りが多く見られる。

- ②外来語の受容における省略現象が日本語学習者に書き、記憶と理解の面で多くの困難をもたらす。原因としては、日本語学習者は英語知識を援用し、外来語を学習するとき、外来語はどの英語原語に対応しているのかを正確に判断することが難しい。
- ③外来語の受容において、品詞種類の変化が起こることが多く見られる。日本語学習者にとって、品詞種類の変化を正しく把握することは非常に難しい。(唐, 2007 : 46-47, 筆者訳)

荘・呉(2011)は中国語母語話者の外来語習得の障害になった難点を以下の 5 つのカテゴリーに分けた。

- ①語彙の変化：語彙範囲が原語より縮小されること、語彙範囲が原語より拡大されること、および語彙が変化し、原語とのズレが生じること。
- ②外来語の造語法：
 - ・ 2 つの原語を 1 つの外来語に合成する。
 - ・ 外来語の受容における省略現象。
 - ・ 原語種類が異なる 2 つの単語を 1 つの外来語に合成する。(例えば：ドイツ語+英語)
- ③権威性のある外来語の造語規則が存在していない。それゆえ、同じ外来語の発音や表記が同時に 2 つ存在しても、特に問題ない。(例えば：インク・インキ)
- ④非常に長い外来語が多く存在しているだけでなく、これからも増殖し続けることが予想できる。
- ⑤和製英語の存在が外来語習得の難点に見られる。(荘・呉, 2011 : 24-25, 筆者訳)

荘・呉(2012)も外来語の難点を 2 点指摘している。1 つ目は「多数が英語から受容してくる外来語は、日本語に取り入れられる際に、発音や意味などの面で多少変化が起こる。その変化はまったく規則性がないわけではないが、それらの規則が混雑であり、把握しにくい。日本語学習者の大きな負担になることが分かった。」

2 つ目は「外来語の多数が名詞であるが、助詞や他の仮名を追加し、品詞の種類が変化することができる。(例えば：デモ → デモる) しかし、日本語学習者、特に初心者にとって、日本語文法の特徴に基づき、外来語の品詞種類を連想し、判断することが非常に難しい。(荘・呉, 2012 : 25, 筆者訳)

3.2.2 カタカナ語回避現象

「一見矛盾するようであるが、外来語の重要性が分かっても、できる限り外来語を使わない中国語母語話者の日本語学習者が多くいる」と王(2009)が指摘している。

李(2000)は中国語母語話者の日本語習得過程における問題点について、次の 3 点を指摘

している。まず、「中国語(漢字)は表語文字であるので、中国語での外来語受容は、意識という方法で行われる時が多数であり、普及されやすいし、中国語母語話者にとっても分かりやすい。それゆえ、日本語学習者は音訳語が多い日本語外来語に対する意識が薄いことが見られる。」それに、「母語知識を援用できる漢語に比べ、なじみのない外来語が怖くて、回避したい気持ちを抱く日本語学習者が多くいることが分かった。」さらに、「英語レベルの高い中国語母語話者は日本語外来語の発音を原語発音と比較して、おかしいと思うときが多い。自分の英語知識が外来語語彙・音声の習得に役立てるが、原語の語彙に拘りすぎると、逆に外来語習得の妨害になることが分かった。」(李, 2000: 46, 筆者訳)

羅(2015)は日本語母語話者との対照分析を通して、中国人日本語学習者の外来語回避現象を考察するために、2014年12月に、日本語母語話者20名と中国の重慶大学・乐山師範学院の日本語を専攻した中国人日本語学習者145名を対象として、言語テスト(多肢選択テスト・単語翻訳テスト)と質問紙アンケートを行い、152部を回収した。(羅, 2015: 14)

収集したデータを分析した結果、以下の3点が分かった。

- ①日本語母語話者に比べ、中国人日本語学習者は全体として外来語の使用頻度が低く、外来語使用の回避現象が存在している。
- ②中国人日本語学習者が低親密度の外来語を回避する傾向が見られる。
- ③外来語回避現象と日本語学習期間と緊密な関係があり、学習期間が長ければ長いほど、日本語能力が高まるにつれて、外来語の回避現象も次第に減少していく。(羅, 2015: 35)

「外来語回避の原因について、調査結果に基づき、母語と外来語の差異、日本語外来語自体の複雑性、学習者の外来語への能力不足、学習者の自信不足に伴う迂回策略などが考えられる。」(羅, 2015: 35)

沈等(2019)は大学日本語専攻の上級学年の学生211人を対象として、ウェブアンケート調査を行い、有効なデータを207件収集した。

結果としては、外来語の使用頻度について、「よく使う」と回答した人はわずか24名、「時々使う」と回答した人は150名、「あまり使わない」は33名である。すなわち、外来語の使用頻度が低い調査対象者は圧倒的に多数であることが分かった。

それに、外来語の習得過程において、「一部の外来語非常に長くて覚えにくい」、「よく使わない外来語が多い」、「分かりにくい外来語が多い」などの問題が見られる。また、49.28%の人は、「語彙が類似している外来語が多く、中国語に訳するときに区別できない」と述べた。一方、52.17%の人は「英語を援用することは外来語の音声習得に役立てるが、外来語の表記習得に役立てなく、逆に妨害になることが多い」と指摘している。(沈等, 2019: 71-72, 筆者訳)

3.2.3 カタカナ語の誤用傾向

志村(2014)は中国語を母語とする JSL (Japanese as a Second Language) 学習者のカタカナ語聞き取り能力とカタカナ語表記の関係について、『『ベッド』の例に見られたように、日本に滞在し、日本語化された発音を聞き取れるようになり、カタカナ語表記が逆にエラーに転じるという現象は、学習者に共通に確認された興味深い結果である』と指摘している。(志村, 2014 : 67)

山下等(2013)は中国語母語話者を対象として、聞き取りテストを行った結果、テストでの表記と意味の結果を比較すると、正答率は表記が 65.2%であり、意味が 79.8%である。「全体的に意味の理解度は表記の正確さより高く、意味は分かるが正確に書けない現象が見られる。すなわち、多くの語が音を聞いて意味を理解する受容的な知識のある受容語彙であっても、意味を正しく表記することができる産出語彙としては定着していないと見える。このような表記と意味の理解のズレが生じる原因としては、語の抽象性やなじみの程度によって起こっていると思われる。」(山下等, 2013 : 45)

他の母語話者と比較した場合、中国語母語話者の外来語の誤りにある特徴について、鄧(2018)は「全 18 種の誤りタイプのうち、中国語母語話者が多く誤用を犯したのは、子音タイプであり、他の母語話者(英語母語話者・韓国語母語話者)の最大値よりも 2 倍以上多い」と指摘している。(鄧, 2018 : 250)

霍(2021)は中国人日本語学習者の外来語誤用を解明するために、中国の某大学日本語教育・ビジネス日本語専攻の学部 1 年生・2 年生と 3 年生全員を対象として、英語外来語の語彙テストを用いたアンケート調査を行った。調査は 196 件の有効アンケートを回収した。(霍, 2021 : 11)

有効データからみると、「中国人日本語学習者の外来語誤用は、主に音声レベルと語義レベルに集中していることが分かった。四択問題については、音声レベルの誤用が特に多く、表記法が類似するいくつかの外来語を挙げる場合、正答の判断が難しくなった。また、四択問題より自由度が高い穴埋め問題と単語翻訳問題に関しては、音声レベルだけでなく、語義レベルでも誤用が多く観察された。」

具体的に、音声レベルに見られる誤用は、以下の 8 種類に分けられた。「①長音に関する誤り、②促音に関する誤り、③撥音に関する誤り、④濁音に関する誤り、⑤拗音に関する誤り、⑥他の仮名の誤り、⑦平仮名とカタカナの混同による誤り、⑧平仮名で書いてしまう誤りである。」

一方、語義レベルで見られる外来語の誤用は、「①意味が類似している単語の区別に関する誤り、②表記が類似している単語の区別に関する誤り③意味と表記が全く異なる誤り、④意味が不完全である誤り、⑤余計な意味を加えることによる誤り、⑥品詞は異なるが意味は近い単語の区別に関する誤りの 6 種類に分類された。それに、文レベルで見られる外来語の誤用は、意味が通じないものと文法的な間違いによるものである。」(霍, 2021 : 40)

馮(2021) は日本語学習者コーパス(多言語母語の日本語学習者横断コーパス : I-JAS) に

載っている中国人日本語学習者の外来語使用例を分析した結果、「特殊拍における誤り、特に長音と促音に関する誤りが最も多いことが分かった。撥音の誤りがあまり見られなかったことから、中国人日本語学習者にとって、撥音が習得しやすく、長音と促音が習得しにくいことを解明している。一方、子音と母音の誤りも多く見られる。特に、母音の誤りは子音の誤りの2倍以上である。すなわち、中国人日本語学習者にとっては、母音より子音のほうに区別しやすいと考えられる。」(馮, 2021 : 177)

3.2.4 日本語教材の不足点

「中国人の学習者は学校の教科書から習得できる外来語がかなり少ないことが現実である。しかし、一旦職場に入ると、日本語知識を利用する仕事の現場において、文法より日本語語彙力、特に外来語の語彙力が遥かに重要となる。機械具の説明とか、配合成分の紹介とか、大量の専門用語の外来語が使用されている。従って、学校の外来語学習と実際の外来語使用の間に大きなギャップが存在している。」を李(2011)が指摘している。

「中国での日本語教育は、それぞれの教育レベルにおいて、教育部が作成した学習指導要領によって行われている。そのいくつかを見てみると、カタカナ表記による外来語の導入も概観できる」と王(2011)は説明した。

「大学における第二外国語としての日本語(専門科目としての日本語と異なる)の場合、『大学日語課程教学要求』をみると、1300語彙を日本語教育の基本語彙としているが、そのうち、423語がカタカナ表記による外来語である。外来語が重視されているとは言える。しかし、中等教育段階の日本語シラバス『日語課程標準』には、基本語彙800語が載せられているが、そのうち、カタカナ表記による外来語はわずか36語であり、コンピューター関係の外来語は「パソコン」1語である。外来語が基本語彙として重視されていない」と王(2011)が指摘している。(王, 2011 : 12-13)

中国語母語話者のカタカナ語習得過程における問題点について、耿(2022)は2020年4月から8月にかけて、8名の上級日本語学習者を対象として、半構造化インタビューを実施した。その結果、複数の面から問題点が見られている。

1、学習支援の問題点——

- ①教科書の補助：協力者全員から、「教科書にある外来語は簡単な日常会話なら足りるかもしれないけど、日本人と実際に日本語で会話したら足りるわけない」という意見がある。
- ②参考書の補助：外来語の知識をまとめている参考書があるが、「でも、その語源や原語などもつけて欲しい」という意見が見られる。
- ③教師の指導：協力者全員からは、「教師が授業であまり教科書に載っていない外来語を補充してほしい」という回答がある。
- ④日本語環境：日本にいるような本場の日本語環境の実現が難しく、授業でも多くの外来語

に触れないことが難しい。「日本人の友達とチャットしたり、日本の映画やドラマ、アニメを見たりしたら、教科書より多くの外来語を身につけた気がする」というように、「主たる習得ルート」は授業外の環境にあることが分かった。(耿, 2022: 29-30)

2、言語特性の問題点——

- ①中国語知識の影響：協力者全員から、「同じ語彙に外来語と漢語と両方の表記がある場合、外来語の表記より漢字表記のほうがさきに思い浮かぶ」という回答をもらった。母語特性の影響で育った学習者は音訳の外来語への受け入れが苦手であると考えられる。
- ②表記の親密性：カタカナ表記に対する親密性が比較的に低いため、外来語の多い文章は読みにくい。
- ③英語知識の影響：協力者全員から、「英語知識が役立ってるが、そのため、英語語源でない場合、苦手意識が生じてしまう」という回答をもらった。
- ④音韻類似性：「外来語の英語原語との音韻的類似性の高低によって、処理上の難易度も違ってくる」という意見が見られる。
- ⑤語彙の使用頻度：「使用頻度の高い外来語はやさしいが、使用頻度が低い外来語だと難しい」という意見がある。
- ⑥文脈：「外来語の意味は具体的なものなので、容易に推測できるものではないから、文脈を頼りにしていない」という回答がある。
- ⑦ニュアンスが異なる：「外国語が外来語化し、原語と微妙なニュアンスのズレが存在することに気づきにくい」という意見が見られる。
- ⑧「外来語の発音ルールを捉えにくい」という回答が多く見られる。(耿, 2022: 30-32)

3、学習者特質の問題点——

- ①学習意識：知らない外来語に対し、協力者全員からは「一般的にはまず英語知識を使って意味を推測するが、それでもわからない場合は辞書で調べるか、そのまま放置することになっている」という回答がある。
- ②応用意識：「純正の英語発音を守るため外来語の使用を回避する」と「外来語を多く使うとおしゃれな気がするからよく意識して使うようにしている」の対立する回答が見られる。
- ③態度：外来語が急増することに対し、否定的な態度をとる学習者だけではなく、肯定的な態度をとる学習者もいることが分かった。
- ④言語インプット・アウトプット：「今の日本人は外来語をよく使うから、聞き取れなかったら困る。もし上手く聞き取れると困らずに済む」と「漢字語彙ばかり使うのではなく、必要に応じて適切に外来語を切り換えることで、日本語らしい日本語を産出できる。そうすると自身が高まる」の意見が見られる。
- ⑤漢字との比較：協力者から、「カタカナ語を難しく思うのは、それ自体が難しいのではな

く、中国人学習者にとってカタカナ語彙より漢字語彙が親しみのある表記形式であるため、外来語を難しく思ってしまう傾向があるからである」ということが分かった。

- ⑥専門化：「私の研究分野は経済学なので、いつも見たことのない新しい外来語が出てくる」という回答をもらった。すなわち、外来語は特定の категория に集中し、自分の専門領域により、学習者は接触できる外来語の量が大きく違うことを示している。(耿, 2022 : 32-33)

3.3 中国語母語話者向けのカタカナ語教育

中国語母語話者向けのカタカナ語教育について、中国教育現場における教育と日本教育現場における教育、両方とも不十分であると批判されたことが多いそうである。その実態と改善策を解明するために、本節では、「カタカナ語の指導」、「日本語教材の改善」、「副教材の導入」、「英語援用の位置付け」と「学習システムの開発」の5つの面から、中国語母語話者向けのカタカナ語教育を考察する。

3.3.1 カタカナ語の指導

「外来語などのカタカナ語は、日本語学習者にとって学習が難しいものの1つであるが、カタカナ語に関連する研究は多いとは言えず、現場でも十分な指導がされているとは言えない」と山下等(2013)が指摘している。(山下等, 2013 : 41)

鄧(2018)は日本語教育の現場において、「4種類の語種の中で外来語の指導がほとんど見られない。すなわち、日本語教材や日本語教師は主に和語と漢語を教えている一方、外来語を特別なものと見なし、授業の中で体系的に取り扱って指導することが極めて少ない」と考察している。(鄧, 2018 : 243)

上述のカタカナ語の指導不足に対して、馮(2021)は中国人日本語学習者の外来語使用例を分析した結果から、「特殊拍・子音・母音における誤用が多い問題を解決するために、日本語の音声指導では、長音と促音の区別を重視すること、濁音・半濁音・清音の聞き分け訓練をより多く行うこと、母音の発音を重視する発音訓練を推進することがポイントである」と指摘している。(馮, 2021 : 177)

「平仮名と比較して、片仮名の教育は軽視され、片仮名は常に平仮名の付属品と見なされているそうである」と李(2000)が述べた。それに、「日本語教師の軽蔑と先入観により、日本語学習者も片仮名を拒否するようになるので、外来語学習の悪循環が形成されることが分かった。また、一部の日本語教師は、平仮名を英語の大文字に相当するものと見なし、片仮名を英語の小文字に相当するものと見なして教授している。これは学習者の誤認識を深める可能性がある。」(李, 2000 : 46-47, 筆者訳)

それらのカタカナ語教育問題に対して、李(2000)は以下の改善策が提案されている。「①

日本語教育における外来語の使用数を増加し、その使用範囲を拡大する。②外来語の特徴と分類方法をまとめ、学習者に教える。③外来語の日本語化や原語との発音・意味のズレなどの外来語認識を育て、日本語学習者の外来語の理解度を向上させる。」(李, 2000 : 47, 筆者訳)

3.3.2 日本語教材の改善

耿(2022)は、「日本語における外来語の割合を他の語種に比べると相対的に低いので、教科書と参考書を編纂するとき、各構成要素のバランスも考慮に入れなくてはならない。また、教科書と参考書は出版物として、紙幅等の制限により、外来語の数を単純に増やすのではなく、どのような外来語を増やすのがより重要である。」と提案している。

それに、「このような実情に対応し、日本語教師も自ら工夫し、積極的に外来語を補充する意識を持つ必要がある。一方、外来語を否定的な態度をとる学習者の心理と外来語の使用回避は、外来語の習得と運用を妨げる要因になりかねない。この点に注意を払い、学習者の心理的障壁を解消したら、外来語教育を促進することができる。」と耿(2022)は指摘している。(耿, 2022 : 54)

霍(2021)は中国人学習者が使用している日本語教科書『日本語総合教程』の外来語に関する説明が少ない点を発見した。具体的には以下の4つの現象が見られる。「①外来語を形成する時、音声レベル、語形レベル、語義レベルと使用法において、一定の規則があることについての説明はない。②外来語の語源、原語の発音記号が載っていない。③外来語の品詞種類が明記されていない。④練習では少数の簡単外来語が繰り返し使われている。」

それに、上述の現象を通し、日本語教師に対して以下の助言がある。「外来語には変化規則がある事実を学習者に教える必要がある。また、特殊拍における誤用が多いので、特殊拍の形成にはどのような規則があるかを明確に説明する。」

「外来語語彙の教授法について、難しい外来語をコンテキストに置き、学習者に語の意味をコンテキストの中から捉えさせる方法が考慮されている。」(霍, 2021 : 43-44)

「グローバル時代における日本語教育を見直す必要がある。特に、日本語教科書の改善やカリキュラム設定など、常にその変化に伴った対策を取る必要がある」と田島・金(2011)が指摘している。学習者のニーズに応えられる教科書やカリキュラムについて、以下のように提案している。

- ①情報把握。グローバル時代の情報収集の手段をうまく利用し、すばやく、正しく情報を入手し、適切に伝えることが大事であると思う。ここでは教育者だけではなく、学習者自身の情報収集も進める必要がある。
- ②言葉の変化や時代の変化を教科書に再現する。日本語教育で使われる教科書は文法中心のものが多く、特に新しく生まれた外来語がほとんど見られない。したがって、教科書に

使われる文章は母語話者の身近な生活や考え方、流行を反映したものを採用する必要がある。しかし、簡単に日本語に言い換えられる外来語・外国語や耳慣れない外来語・外国語などが入った文章は安易に使わないようにすべきである。主に広く国民一般を対象にしている官公庁、新聞、放送等によく使われる文章や、一般の人々の生活に浸透した外来語が使われている文章を教科書に使うべきである。

- ③情報収集の手段を最適利用。教科書はどうしても掲載範囲が限られているため、学習者に満足がいくように作り上げることは到底無理なことである。インターネットの普及の便りを最大限に利用して続々と増え続ける外来語の学習を行うことが非常に重要な学習方法であると思う。
- ④公的機関を利用した情報収集に力を入れる。グローバル化が進む今、的確な情報収集は必ず公的機関を利用する必要がある。日本語といえば、国立国語研究所の調査結果や新聞機関で行う世論調査の結果を元に言葉の変化の現状を把握、それによった対応策を出すことが重要である。(田島・金, 2011 : 131-130)

3.3.3 副教材の導入

唐(2007)は「日本の割に新しい小説、漫画、音楽、映画などの作品を学習材として活用したら、日本語学習者は外来語の語彙を拡充し、外来語が実生活ではどのように使用されているかを理解することができるようになる」と指摘している。「日本人によって創作される新鮮な作品は日本人の心理、また日本社会の現状を反映しており、高い参考価値があるので、日本語学習者を積極的に利用させる」と主張している。

「それに、これらの作品の多くは若者を対象としているので、外来語の使用数と使用頻度が比較的に高く、外来語教材としても適している。つまり、日本語学習者は新しい外来語を習得できるだけでなく、日本人や日本社会に対する理解が深まり、学習意欲が湧くこともできる。」(唐, 2007 : 47, 筆者訳)

「副教材としては外来語が数多く出てくる内容の文章を利用することは有効な外来語教授法である」と王(2011)が指摘している。「例えば、服装・ファッションに関する内容、化粧品、薬品に関わる内容などが外来語が頻出する内容として考えられる。それに、日本語学習者の日本語レベルが初級である早い段階から、カタカナ表記による外来語を導入し、心理的抵抗を少なくするような方法を採用することも有益である」と主張している。(王, 2011 : 14)

3.3.4 英語援用の位置付け

「中国人学習者の外来語習得において、英語と表記上・意味上のズレがある外来語を英単語の知識から援用するのではなく、日本語の語彙として習得できているかは外来語を多

く含むテキストを効率的に読む上でポイントになってくる。このように考えると、英単語の語彙処理は、外来語を多く含むテキストを読む上で必要条件ではない」と大和・玉岡(2013)が指摘している。

「しかし、一見外来語を含むテキストを読む際に、英単語の語彙知識か無関係なものに思えるが、英単語をうまく処理できることにより、外来語を処理するときのヒントになることも否定できない。外来語として知らない語彙が出現したときに、L2 である英単語から外来語のある程度の意味を推測することができる。特に日本語の語彙力が低い学習者にとっては、英単語の語彙処理能力が助けになる可能性も高い。(大和・玉岡, 2013 : 31-32)

従って、中国語母語話者向けの外来語教育において、英語援用を勧めることは非常に適切な教授法とは言えないが、英語知識の外来語習得に対するポジティブな影響が存在しているので、ある程度の英語援用方法を日本語学習者に教えることも外来語教育を促進できると考えられる。

玉岡(2018)の研究で、「L2 英語から L3 日本語の外来語への音韻類似性の促進効果が観察されたことから、中国人学習者は、すでに学習した L2 英語の語彙知識を L3 日本語の外来語と結び付けるほうが効果的に理解できる」と指摘している。従って、「今後、L3 日本語の外来語の教授・学習に、L2 英語の知識を活用するアプローチも考慮されてよい。」(玉岡, 2018 : 32)

中国語母語話者向けの外来語教育について、李(2011)は以下の4つの意見を提出した。

①日本語教師はまず、片仮名に対する態度を正す必要がある。

学習者を対象として、平仮名と片仮名を分けて記憶させる教授法と同時に記憶させる教授法を実施し、比較した結果、平仮名と片仮名を分けて記憶する学習者は、しばしば混乱が生じて、初級文法を習得したあとも、片仮名を正しく書けなかった。一方、平仮名と片仮名を関連付けて記憶した学習者は、記憶過程を通して、平仮名と片仮名の変換に慣れるようになり、片仮名の記憶が定着し、外来語学習の基盤が築かれた。

②外国語の語彙指導を行うとき、外来語の語源知識を適当に補足し、説明する。

外来語の原語を学習者に見せることで、新鮮な感覚を与えることができる。それに、外来語とそれに対応する原語を発音、意味、語感などの側面で比較させ、学習者の外来語に対するイメージを深める教授法も考慮されている。

③中国語音声から連想させて、外来語の記憶を強化する方法も考慮されている。例えば：吃了「パン」会「胖」(パンを食べると太くなる)

④日本語教師は外来語の表記規則を積極的に調べ、まとめて学習者に教える必要がある。(李, 2011 : 51, 筆者訳)

羅(2015)は中国人日本語学習者に向けた外来語教育について、次のようなアドバイスを

提言した。

①教材のテキストの中の外来語の語彙量を増やす。

②外来語教育を重視する。

外来語の難問を解決するために、外来語の教育を重視しなければならない。教師側、教材などの方面から外来語の存在感を高める必要がある。特に、日本語学習者の基礎知識システムを打ち立てる段階には、外来語は漢字語や和語と同等に重視されることは非常に重要である。

③外来語専用の教材の開発。

近年、外国語の訓練するための e-learning 教材などが開発されているそうである。しかし、中国国内には外来語専用の教材あるいは書類はほとんど空白である。従って、外来語専用の教材を開発することにより、学習者に外来語に関する体系的な知識や最新情報などを伝えるのは非常に重要である。

④学習者の外来語のインプットを広げる。

外来語語彙力が非常に高い学習者のほとんどが日本のアニメ、ドラマ、テレビ番組、映画、ファッション雑誌、あるいは人気なアイドルに興味を持っており、それによって大量の外来語が頭に「入力」される。

⑤学習者の外来語使用の積極性を培う。

教科書に沿って学習を進めても、習得した外来語を実生活に使う機会が少いと、学習者の外来語習得が停滞を招くだけでなく、学習動機の維持も難しくなる境地に陥りやすいので、外来語を積極的に使用させることが必要である。(羅, 2015 : 36-37)

中国人向けの日本語外来語教育について、王(2009)は5つの面から提案した。

①教科書の中の外来語の数を増やす。

調査から日本語専攻の中国人学習者が外来語の重要性をよく認識し、外来語学習を重視していることが分かった。しかし、学習者が生活に出会った外来語を十分注意せず、主に教科書から外来語を学習している。対象者が使っている教科書「新編日本語」6冊の中に外来語が合わせて600語にも達していない。

②学習者に外来語の特徴と法則を把握させる。

おおよそ80%の外来語が英語由来である。英語から外来語に変遷する途中、発音、語形、語義などいろいろなゆれが起こった。それに、外来語から英語に還元する時にもある程度の法則がある。この法則を十分理解できれば、外来語を還元する時、近似音を混淆するなどの間違いを避けられる。

③学習者に外来語辞書を活用させる。

外来語をうまく運用できるように、外来語辞書は不可欠なものであると考えられる。

毎日新しい外来語が出ているに伴い、毎年新しい外来語辞書が出版されているそうである。普通の日本語辞書より、外来語辞書に載っている外来語は語数も多く、紹介もより詳しい。外来語をうまく使うために、外来語辞書を持ったほうが良いと考えられる。

④学習者の視野を広げる。

日本語専攻の学習者は主に教科書から日本語知識を習得しているが、教科書に載っている知識に限られている。学生の知識を豊かにするために、学習者の日本語小説を読み、日本語ニュースを聞き、日本語ドラマを見る習慣を育てる必要があると考えられる。それらを多く接触すれば、日本語語彙の量も拡大できて、使用法も正確的に把握できると考えられる

⑤英語教育も重視する。

外来語学習方略の調査から、日本語学習者は英語知識をよく援用していることが分かった。それに、調査結果の相関分析により、英語の学習時間は外来語の学習成果と有意な相関にあることを示している。つまり、日本語専門の学習者として、日本語を真剣に学習する同時に、英語学習も軽視すべきではない。(王, 2009 : 35-36)

於・包(2012)により、中国人日本語学習者向けの外来語教育について、4つの提案が挙げられた。

①雑多な外来語を選別する能力を育成する。

流行語としての外来語は多く作られたが、多数の日本人に認められず、生命力もかなり短く、いつの間にか消えてしまう。学習者はそれらを選別しなく、すべて受け入れるのは大変なことになる。それに、習得した外来語は死語になったら、学習者の自信まで損ねてしまう。従って、日本語学習者であれ、日本語教育者であれ、外来語を選別し、盲目的な真似をしないほうが良いと考えられる。

②個人の語学知識を生かし、英語学習と日本語外来語学習の相互促進を目指す。

多くの日本語学習者が日本語を学び始めた時、英語レベルもかなり上達していた。従って、英語知識を生かし、自分なりの記憶方法を探し、英語から来る多くの外来語の習得には役立つ。フランス語、スペイン語、オランダ語などの語源から来る外来語の数が比較的少ないので、使いながら覚えられると考えられる。

③読み物を通して、外来語の量を拡大する。

日本語の新聞、雑誌などの読み物を購入し、指定された学生の課外読み物あるいは素読教材、読解文教材として活用し、最新の外来語を接触するチャンスを与える。テキストに載っている外来語が実際に応用されている外来語のごく一部であるので、実際応用に困らないために、他のルートから学習する必要がある。各大学の日本語学部は日本の民間国際交流団体、教育部門と長続きする連携関係を結び、定期的に新聞や雑誌を寄付してもらい、教育現場に利用するのは最も現実的な方法であると考えられる。それによ

り、日本語学習者は国際情勢を了解する同時に、最新の外来語も習得できる。

④教育者の力を借り、最新の外来語を学習者に教える。

年齢別に見ると、年寄りに比べ、若者の日本人が外来語をよく使っているそうである。従って、日本人の日本語教師を募集するとき、多少若者に偏ってもかまわないと考えられる。また、日本語教師は定期的に研修を受けて、自分自身の日本語レベル、及び外来語語彙力を上げる必要があると考えられる。(於・包, 2012 : 81-82)

3.3.5 学習システムの開発

柴田(2018)は2016年11月から12月にかけて、日本に在住する大学学部に所属する研究生の中国人留学生1名(女性)を対象として、スマートフォンの音声入力機能を活用し、カタカナ語の発音練習と書く練習をする授業実践研究を行った。対象者の日本語能力はN3レベル(日常場面で使われる日本語をある程度理解できるレベル)であると推察された。

授業の日程は以下の通りである。2016年11月24日学習事前テストを行った。11月25日カタカナ発音テキスト学習「開始」、12月8日カタカナ発音テキスト学習「終了」(学習期間は2週間)、12月9日学習事後テストを行った。(柴田等, 2018 : 36)



対象者の学習方法は、本人が所有している iPhone・iPhone メモアプリの音声入力機能を利用し、メモアプリに単語を発音して入力することである。正しく発音したら、正しく単語が表示され、間違っ て発音したら、間違っ た単語が表示される。表示された表記を正解と比較し、リアルタイムで正誤の判断ができる。(図 27) 学習する単語は、対象者が学習したことのあるカタカナ語プリントの 117 語から 40 語を抜粋したものである。(柴田等, 2018 : 37)

カタカナ語学習テキスト
期間:11月25日~12月8日

学習の行い方

- ① iPhoneのメモを開きます。
- ② 音声入力で単語を、3回入力します。
- ③ 入力した文字と答えが同じ → 「○」記入
入力した文字と答えが違う → 「入力された文字」記入
- ④ ①~③を繰り返す。
- ⑤ 枠が一杯になったら空いているスペース、裏面も使用してよい。

ex.)

	日	/	/	/	/	← 日付を記入します。
	①					← 1回目
	②					← 2回目
クッキー	③					← 3回目

(図 27) 学習の行い方

授業実践研究の結果として、「事前テストで発音問題を実施した時に英語に近い発音が

多くあったが、事後テストでは日本語に近い発音をする単語がほとんどであった。テキストを発音学習する際に英語の発音をすると別の単語が入力されてしまうため、発音学習を重ねるたびに日本語の発音に近づいていったと考えられる。それに、事前テストと事後テストの正解率を比較したところ、すべての問題において成績が 1.6 倍以上上昇したため、学習の効果があったと考えられる。」(柴田等, 2018 : 40)

中国人日本語学習者のカタカナ語回避現象を軽減するために、邸(2022)はカタカナ語学習支援用文章変換システム「EULIKO」(A system for Encouraging Use and Learn of Imported-words' Katakana-Orthography)を開発した。このシステムはカタカナ語環境



を構築するために、文章をシステムに入力すると、文章中の形容詞・名詞・動詞がカタカナ語に変換され、カタカナ語あふれる文を生成できる。(図 28)

(図 28) EULIKO システム

そして、EULIKO システムの利用が回避現象の発生にどれくらい影響を与えるかを検証するために、邸(2022)はまず予備的なインタビュー調査を通し、システムが回避現象を改善する可能性があると考えられた。そして、北陸先端科学技術大学院大学の学生 16 名を対象として、EULIKO システムを利用してもらい、使用前後のカタカナ語の回避数(カタカナ語を選択しない数)を比較する本実験を行った。(邸, 2022 : 10)

結論として、「本実験と有意差検定の結果を通して、対照群より実験群の回避回数が 30%減少したので、中国人日本語学習者のカタカナ語回避現象が改善されたことが分かった。EULIKO システムの有効性が検証された。」(邸, 2022 : 23)

李・板谷(2006)は中国人留学生を対象として、日本語単語についてのアンケート調査を実施し、中国人日本語学習者にとって一番難しい日本語語種はカタカナ語であるという結論を出した。それに基づき、「Fireworks」や「Dreamweaver」などのソフトウェアを利用し、イラスト・写真付いてる中国人向けのカタカナ語 e ラーニング教材(オンライン学習

教材)を開発した。(図 29)(李・板谷, 2006 : 54)

教材の内容は主に日常生活の中で頻繁に使用されているカタカナ語 216 単語である。頻繁に使用されているカタカナ語はほとんど名詞であるので、たやすく画像化される。意味を明確にするため、これらのカタカナ語を食べ物、飲み物、野菜、果物など 22 カテゴリに分類し、それぞれをレッスンにまとめた。教材のレベルは日本語能力試験 4 級から 1 級までのカタカナ語である。(李・板谷, 2006 : 53)

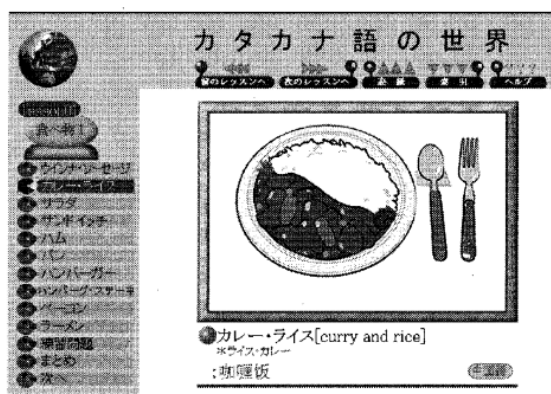


図 3 画像付のカレー・ライスの学習画面

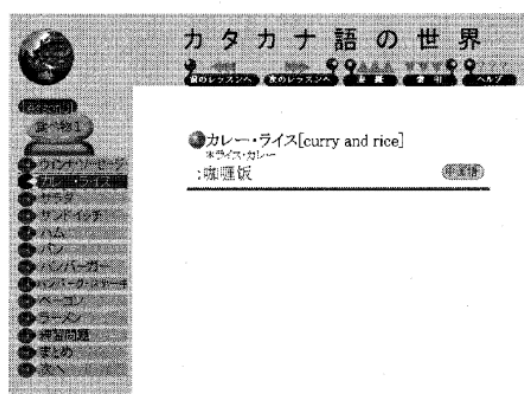


図 4 文字のみのカレー・ライスの学習画面

(図 29) e ラーニング教材 : カタカナ語の世界

画像付きカタカナ語教材に対して、上述の教材のために作成した単語ボタンや説明文などを使い、同じ内容の文字のみのカタカナ語教材を開発した。違いはイラスト・写真がないことだけであり、練習問題はまったく同じである。「カタカナ語の世界」、すなわち画像が付いているカタカナ語教材を教材 A と呼び、「カタカナ語 e-Learning 教材」、すなわち単語と解釈のみの教材を教材 B と呼ぶことにする。(李・板谷, 2006 : 54-55)

2005 年 10 月 1 日からカタカナ語教材を公開して以来、100 名以上の学習者が応募した結果、教材 A と教材 B の有効学習者は各 45 名となり、全員は大学生や大学を卒業した日本と関係がある会社で仕事している中国人である。(李・板谷, 2006 : 55)

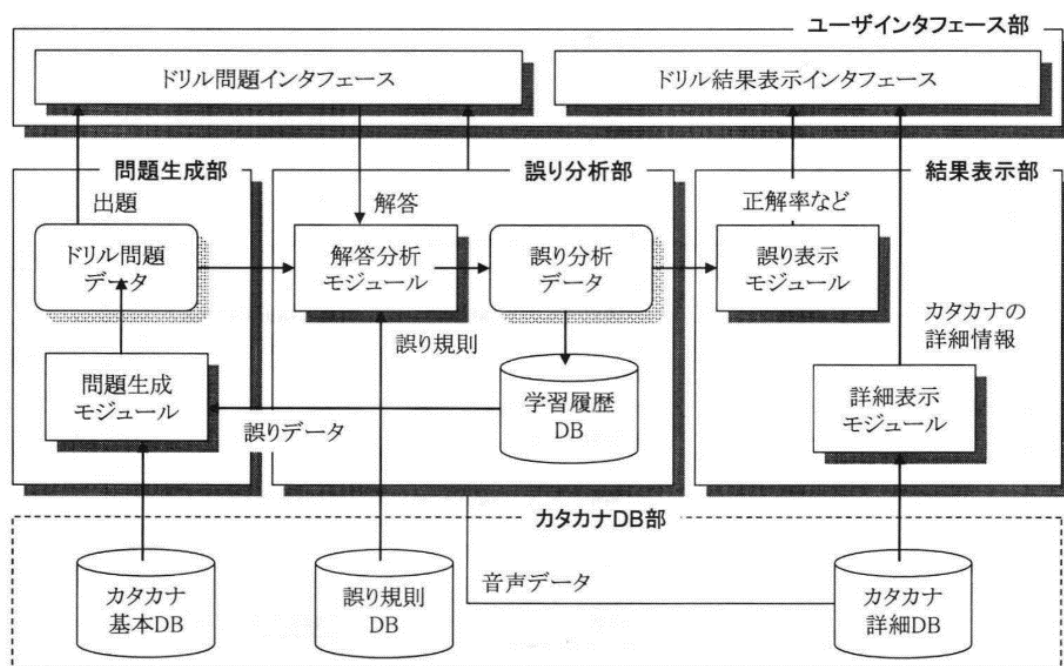
「e-Learning 教材及び視覚的刺激的有効性を検証するために、収集した有効データに基づき、t 検定を行った結果、教材 A の練習問題の平均成績は教材 B のより高いという結論を得た。それらの比較結果により、イラストや写真がカタカナ語の学習にとって非常に有効であることが示された。つまり、教材 A では、より多くの視覚的刺激が与えられることによって学習は強化された。内容を具体的に示す絵と共に提示することで言語記憶が促進され、学習者の成績もよくなった。視覚的刺激的有効性が実験的に検証された。」(李・板谷, 2006 : 57)

「中国語母語話者に着目するカタカナ語学習システムの環境は整っていない。中国人向けの日本語教育ではカタカナ語の学習に必ずしも重点が置かれなかった。カタカナ語の習

得が系統的な学習より、実践的な日常会話での体験に任されてきた」と盧等(2007)が指摘している。

このような状況に鑑み、盧等(2007)はカタカナ語聞き取りの問題点(以下「弱点」と呼ぶ)を解決するために、日本語能力試験 1~2 級程度の能力を有する中国人日本語学習者を対象とした聞き取りドリル型学習システム「KataLis」(Katakana word Listening)を試作した。

「KataLis では、まず、システムが学習対象のカタカナ語の音声を提示する。次に学習者は、音声を聞き取り、キーボードから解答する。10 問 1 セットの問題を解答した後、システムは、採点結果を返す。引き続き学習では、採点結果分析(弱点を含む誤りパターン分析)に基づき、システムは弱点に基づき、問題を選別して出題する。」(図 30)(盧等, 2007 : 324)



(図 30) 「KataLis」のシステム構成

大学院在学の日本語能力試験 1・2 級合格の中国人留学生 5 名を被験者として、KataLis でドリルを約 10 セット程度繰り返してもらおうという基礎評価実験を行った。

結果として、『KataLis』は高い精度で誤りパターンを分析でき、出題も適切であることが確認された。また、被験者の各弱点の正答率の推移により、弱点が改善される傾向が見られる。つまり、「KataLis」の誤り検出・評価機能の妥当性や適応的に繰り返す学習の有効性が確かめられた。」(盧等, 2007 : 331)

第4章 英語母語話者のカタカナ語習得

本論の収集した先行研究に基づき、本章は「英語母語話者のカタカナ語習得過程の認知傾向」、「カタカナ語習得過程における問題点」と「英語母語話者向けのカタカナ語教育」の3つの面から、英語母語話者のカタカナ語習得実態を解明する。

4.1 カタカナ語認識の傾向

3.1.1節で述べたように、鄧(2018)は日本語学習者コーパス(多言語母語の日本語学習者横断コーパス：I-JAS)を利用し、各習熟度段階にある中国語母語話者の外来語の使用実態を明らかにしただけではなく、比較対象として、英語母語話者の外来語使用データにも注目した。それにより、英語母語話者の外来語使用特性(図31)および習熟度別による外来語使用特性の差(図32)が分かった。(鄧, 2018: 247-251)

表5 中国語・韓国語・英語母語話者と日本語母語話者の外来語使用特性

	延べ語数	異なり語数	語彙レベル	誤用数	上位語
中国語母語話者	26.49	13.50	2.64	2.84	ドラマ, アニメ, ケーキ, プレゼント, ラーメン, パソコン, クラス, ゲーム, テレビ, バス, インターネット
韓国語母語話者	34.17	20.44	2.38	5.55	ソウル, アニメ, バイト, ドラマ, ケーキ, プレゼント, ソース, ストーリー, バス, ゲーム, スープ, パーティー
英語母語話者	51.08	30.75	2.12	2.40	シドニー, オーストラリア, ドラマ, アニメ, バス, クラス, ゲーム, レストラン, アメリカ, アリゾナ
日本語母語話者	33.57	21.48	2.23	0.00	テレビ, ケーキ, ドラマ, プレゼント, パン, サッカー, クラス, ストーリー, バス, ラーメン, ゲーム

(図31) 外来語使用特性

図31により、中国語・韓国語・日本語母語話者と比較すれば、英語母語話者の外来語使用量はかなり多く、中国語母語話者の2倍程度である。さらに、外国人なのに、母語話者の日本人より日本語外来語の使用を好んでいることが分かった。主な原因として、母語の影響が大きいことが想定されている。

表 7 習熟度別中国語・韓国語・英語母語話者の外来語使用特性

	習熟度	延べ語数	異なり語数	語彙レベル	誤用数	上位語 (%) (一致率)
中国語母語話者	中級前半	33.51	13.14	2.95	0.66	30
	中級	23.86	13.46	2.79	2.64	70
	中級後半	25.39	13.20	2.66	2.37	70
	上級前半	25.98	13.02	2.54	1.89	50
	上級	21.27	13.36	2.56	0.66	60
	日本語母語話者相当	22.79	14.59	2.47	0.91	50
韓国語母語話者	初級	59.25	21.54	1.29	22.44	0
	中級前半	44.05	23.90	2.39	9.52	40
	中級	37.33	23.27	2.17	7.88	20
	中級後半	32.90	19.28	2.45	4.97	50
	上級前半	25.78	15.62	2.46	2.65	40
	上級	26.66	15.46	2.24	1.31	30
	日本語母語話者相当	17.11	11.41	2.39	1.27	30
英語母語話者	初級	44.77	27.34	2.36	5.20	30
	中級前半	57.17	34.67	2.14	7.53	40
	中級	57.30	32.93	2.10	3.47	40
	中級後半	45.62	29.38	2.03	2.63	30
	上級前半	45.21	31.82	2.09	1.20	40
日本語母語話者		33.57	21.48	2.23	0.00	100

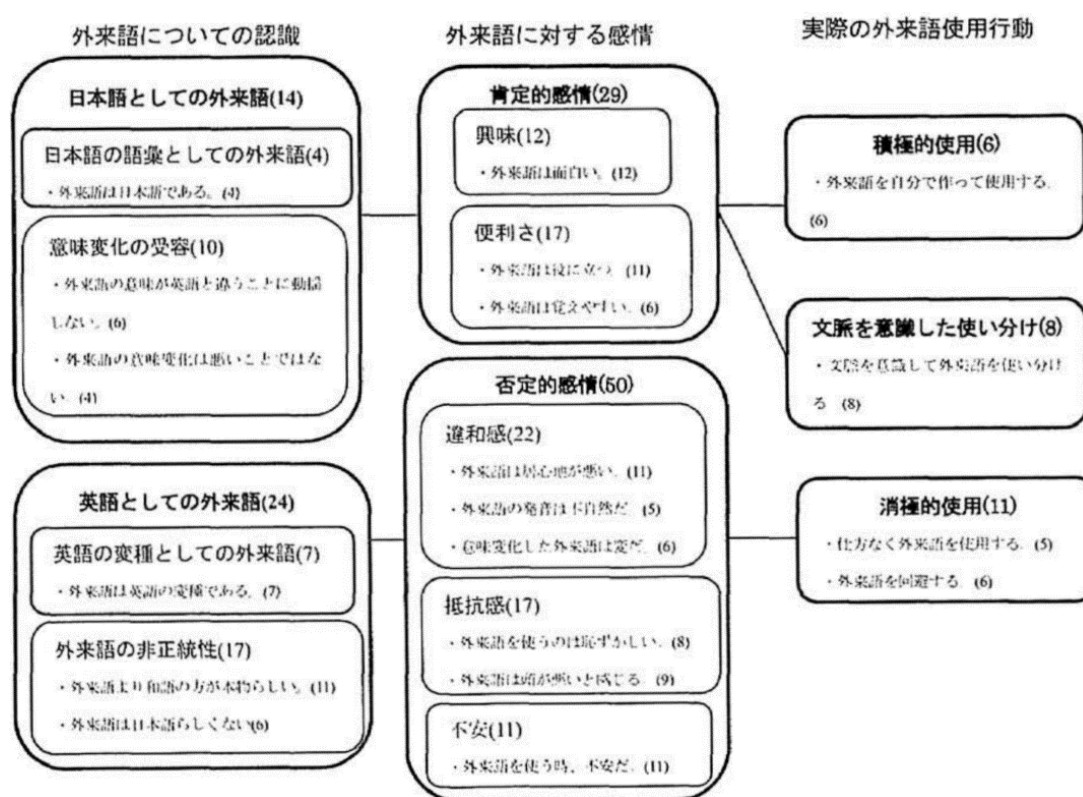
(図 32) 習熟度別による外来語使用特性

図 32 により、「英語母語話者の日本語習熟度の上昇によって外来語使用量は増加せず、むしろ減少する傾向が見られる。その原因として、初級者は様々な要因により、外来語を反復使用しているが、習熟度が上昇するとこうした反復がなくなり、結果として外来語の使用量が増加しなかったり、あるいは減少したりするのである。では、なぜ初級者は外来語を過剰に使用するのであろうか。理由として、①流暢性の不足を補うための単語の自己反復、②言い間違いの言い直し、③日本語がとっさに出てこない場合の外来語による臨時的代用の 3つの原因が考えられる。」(鄧, 2018 : 252-253)それに、「習熟度の上昇につれて使用できる外来語のレベルが段階的に上昇していることが確認された。および習熟度の上昇に伴い、外来語の誤用数はわずかであるが、減少していることが考察された。また、日本語外来語の多くは英語起源であることを踏まえると、英語知識が多いことは英語母語話者の使用する外来語が日本語母語話者に近接しないことの一因になっていると考えられる。」(鄧, 2018 : 256-259)

堀切(2010)は、英語母語話者は外来語に対する認識・感情・行動を考察するために、

2007年7月に、米国の大学で日本語を学習してきた大学生13名(男性8名、女性5名)を対象として、半構造化インタビューを行った。(堀切, 2010: 105)

インタビューから収集したデータを分析した結果、「①外来語に対する認識については、外来語を日本語として捉える認識と、英語として捉える認識が見出された。これらは外来語を対象者母話の英語の枠組みで捉えているか否かという違いに起因していると考えられる。②外来語に対する感情については、肯定的感情と否定的感情が存在することが示された。③実際の外来語使用行動に関しては、積極的使用、文脈を意識した使い分け、消極的使用という3つの使用行動が存在することが明らかになった。」(図33)(堀切, 2010: 106-109)



(図33) *括弧内の数字はデータの件数である

堀切(2012)は、英語母語の日本語学習者の外来語に対する認識・感情・行動と異文化受容態度との関連を解明するために、日本国内の大学機関に所属し、日本語を学習した英語母語話者の大学生・大学院生・研究者および職員、合わせて104名(男性55名、女性49名)を対象として、質問紙アンケート調査を行った。(堀切, 2012: 189)

「相関分析を通し、外来語に対する認識・感情・使用行動と異文化受容態度との相関については、外来語に対する「違和感」が、異文化受容の「分離」、「境界」と弱い正の相関($r=.233$, $r=.214$)にあることが明らかになった。また、外来語に対する感情の「興味」と外来語使用行動の「使い分け」が、異文化受容態度の「統合」とそれぞれ弱い正の

相関 ($r=.235$ 、 $r=.258$) を示した。」

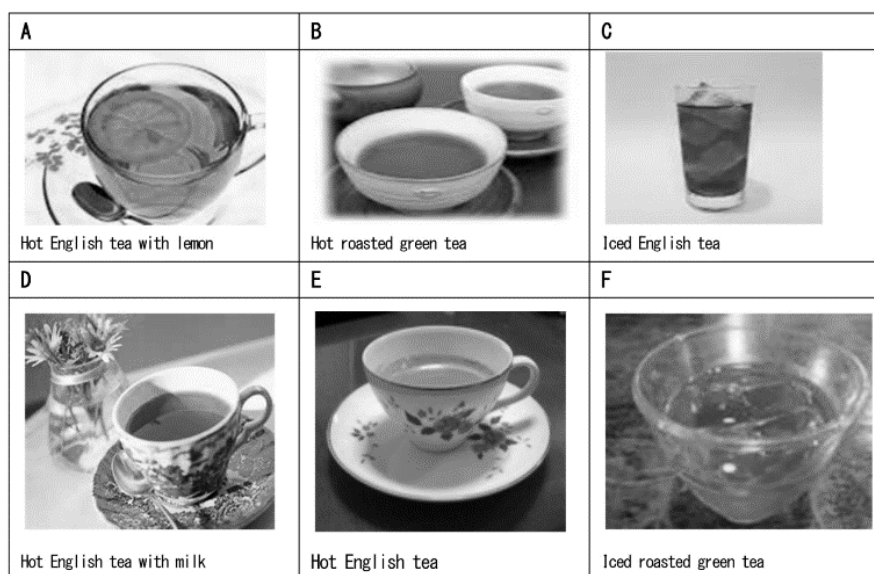
以上の結果に基づき、重回帰分析も行われた。その結果、『統合』の異文化受容態度には、『使い分け』が正の影響を、日本語能力が負の影響を及ぼしていることが示された。つまり、日本語能力が低く、外来語と和語との使い分けを行っている人は、自文化のアイデンティティの保持とホスト文化との相互作用との両方に価値を置く『統合』の異文化受容態度となる傾向があることが分かった。」

また、『分離』と『境界』の異文化受容態度には、「違和感」が正の影響を与えていることが示された。つまり、外来語に対して、適切ではない、変だという違和感を抱く場合は、自文化のアイデンティティの保持にのみ価値を置き、ホスト文化との相互作用を重視しない『分離』、または自文化の保持にもホスト文化との相互作用にも価値を見出さない『境界』の異文化受容態度となりやすいことが分かった。」

それに、『同化』に関して、本研究においては外来語に対する認識・感情・使用行動、および対象者の属性要因からの影響は見られなかった。」(堀切, 2012: 192-193)

池谷・久津(2013)は英語母語話者は英語由来のカタカナ語をどのように捉えているかを明らかにするために、「英語の単語とカタカナ語の意味のマッピング」と「カタカナ語と和語の意味のマッピング」の2つの検討課題を設定し、アメリカのD大学で日本語を勉強していた英語母語話者の日本語学習者18名(男性8名、女性10名)に対して、調査を行った。

調査に利用する語は「Tea とティーとお茶」、「Cap とキャップと帽子」、「Gloves とグローブと手袋」の3組である。調査方法はまず、1つの組中のカタカナ語と和語を知っているか確認する。次に、同じカテゴリーに属しそうな6枚の写真を並べ、それぞれに対し、組中のカタカナ外来語、和語、英語と呼んでも良いか判断させる。(図34)(池谷・久津, 2013: 23)



(図34) 「Tea とティーとお茶」

調査結果として、『英語の原語とカタカナ語のマッピング』について、『Cap とキャップ』のように、英語とカタカナ語が似たような認識分布を示したものもあったが、一方で『Gloves とグローブ』のように明らかに異なる認識分布を示したものもあった。つまり、対象者はカタカナ語は日本語の語彙の一種であり、カタカナ語と英語は異なるものであると認識していることがわかった。」

それに、『カタカナ語と和語の意味のマッピング』について、最もわかりやすい例が『グローブと手袋』である。この2つは明らかに示す対象物が異なるため、違いがわかりやすい。そのため、キャッチャーミットやボクシンググローブに対して、『手袋』とは言わないということがかなり意識されていた。一方、「ティーとお茶」、「キャップと帽子」のように、意味範疇が全体部分関係を持っており、どちらかがどちらかの上位概念であるような、包摂関係を含んだ単語の使い訳はかなり混乱しており、あまり明確な結果は出なかった。」

「このことから、対象の異なる語彙の使い分けはその明確さから習得が早く、それ以外の使い分けはもっと日本語の習得が進まないとききないことが予測される。また、使い分けが分からない場合は母語英語の知識を利用することが分かった」（池谷・久津，2013：35-36）

池谷・久津(2014)は英語母語話者にとって習得しやすいカタカナ語と習得しにくいカタカナ語を考察するために、2013年の7月～9月にかけてH県内の英語母語話者の日本語短期プログラムの学生55名(男性18人、女性37人)を対象として、次の6組のカタカナ語と非カタカナ語の使い分けについてのアンケート調査を行った。(図35)(池谷・久津，2014：30)

カテゴリー	カテゴリー
1 Bottle ボトルと瓶	2 Brush ブラシと筆
3 Glove グローブと手袋	4 Potato ポテトと芋
5 Tea ティーとお茶	6 Ticket チケットと券

(図35) 6つのカテゴリー

アンケートの結果に基づき、英語母語話者のカタカナ語と非カタカナ語の使い分けの傾向をまとめた。

- ① カタカナ語に関して、非カタカナ語に対応する語がない「ペットボトル」、「歯ブラシ」のように指示対象物の名称の中にそのカタカナ語が入っていれば、積極的にカタカナ語を選びやすい。
- ② 「筆」と「ブラシ」の使い分けや「お茶」と「ティー」の使い分けから、日本的なものは非カタカナ語、そうではないものはカタカナ語を選ぶ傾向がある。
- ③ 対象物を表す時、カタカナ語と非カタカナ語のどちらを使えばよいのか不明な場合、

英語の母語の知識を生かして、それと対応するカタカナ語が選択されやすい。

- ④ 「革手袋」を「グローブ」と判断することから、材料や形態など、独自の使い分けの基準を適用して判断することがある。
- ⑤ 一般的に、カタカナ語と非カタカナ語の使い分けは辞書に書いていないことが多いことから、学習者は多くの例から帰納的にその意味カテゴリーを形成していく。そのため、その情報にどのくらいアクセスできるかが習得の鍵になっている可能性がある。(池谷・久津, 2014:43-44)

そして、6つのカテゴリーを習得しやすいと予測されるもの順に再分類してみた。

タイプ I : 一番習得しやすいのが、「グローブと手袋」、「ポテトと芋」のように、指示対象が重なることがなく、カタカナ語で表されるものが特別な形状や状態を示すものである。この場合のカタカナ語は非常に有標なものである。これらはすでに日本語としての処理が終わっており、単なるカタカナ語での英語の言い換えではなく、独自の語彙カテゴリーを獲得したものである。

タイプ II : 習得しやすいのが、「ボトルと瓶」、「ブラシと筆」のように、指示対象は重なっているが、材質や形態、使用方法などで使い分けがされているものである。この場合のカタカナ語は、カタカナ語であることが特に有標であると言えないが、その使い分けの規則が見えれば、ある程度予測が付くものである

タイプ III : もっとも習得がしにくいと予測されるのが、「チケットと券」、「ティーとお茶」のように、一見非常に意味がよく似ているが、使い分けの基準を規則化しにくいものである。(池谷・久津, 2014:44)

池谷・久津(2015)は池谷・久津(2014)の結果を踏まえ、カタカナ語と非カタカナ語の使い分けと日本語レベルの関係を解明した。池谷・久津(2014)における対象者55名は、日本語のレベルは自己申告であるが、初級が12人、中級が32人、上級が9人であった。

その傾向を比較・分析した結果は以下の通りである。

タイプ I は初級であれ、上級であれ、回答に差が無いタイプである。早い時点でそのカタカナ語の使い分けが理解されていると考えられるものである。

タイプ II は初級と上級の回答が大きく異なるタイプである。初級は混乱しているが、上級になると回答に一定の傾向があり、日本語学習の習得の進みにつれ、カタカナ語と非カタカナ語の使い分けの規則を理解していくと考えられるものである。

タイプ III は初級でも、上級でも回答が混乱しており、一定の傾向がないものである。初級はもちろん、上級であっても、使い分けの規則性が捉えにくく、回答に確信がないものである。(池谷・久津, 2015:34)

4.2 習得過程における問題点

「日本語のカタカナ語の発音(例えば、オーバフロー)を聞いても、その語源となった英単語は「Overflow」であると認識することは英語母語話者であっても難しい場合がある」と柴田(2018)が指摘している。(柴田, 2018: 35)

堀切(2012)は「英語母語話者が外来語に対して、『適切ではない』、『変だ』という違和感を抱いた場合がある」と指摘している。『違和感』とは、言語学習の過程で自らの母語を基準として、それと異なるものを『誤ったもの』とする姿勢であり、これは異文化環境において自文化主義的傾向へとつながる可能性が推察される。(堀切, 2012: 193)

堀切(2008)は英語母語話者の外来語に対する苦手意識と受容態度を解明するために、英語母語話者93名(滞日34名、滞米59名)を対象として、質問紙アンケートを行った。

結果としては、「学習者は外来語学習における4技能に関して、困難を感じているという実態が明らかになった。つまり、外来語で書いてあるものを読むこと、外来語を書くこと、外来語の単語を発音すること、そして外来語の単語を聞き取ることの4つに対して、学習者は苦手意識を感じていることが分かった。」

また、「その苦手意識を大きく4つに分けた。すなわち、外来語を使用することに対して感じる『使用抵抗』、外来語の意味に対して抵抗を感じる『意味抵抗』、外来語を学習することに対して困難を感じる『学習困難』、及び外来語学習時や使用時に感じる『不安』である。この4つの要素により、英語母語話者学習者の外来語苦手意識が構成されていると考えられる」(堀切, 2008, 40-41)

佐藤(2011)は英語母語話者対象の日本語教育における英語起源の外来語の扱いを考察するために、2005年9月から10月にかけて、フィリピン共和国ビサヤ地方のセブ島(住民は英語母語話者である)に行き、現地調査を行った。調査方法として、セブ島の教育機関での日本語授業・教材を考察し、地元の日本語学習者に対して、インタビューを実施する。(佐藤, 2011: 90)

結論は、「国内外の学習者の置かれている状況を比較した場合、明らかに国内の学習者に対して、外来語が「供給過剰」の状態にあると言わざるをえない。これらの外来語は学習者を困惑させる可能性のある日本語の一要素であると考えられる。」

一方、「海外の日本語学習者に関して、国内の学習者と対照的に、周囲に外来語があまり存在せず、接触する機会が圧倒的に少ない。しかし、その分学習者が得る外来語の語彙量が学習項目を選定する学校や教師に委ねられる形となり、全体としての不足は否めないが、必要最低限の外来語を学習することができる。教室や学校などの学習機関以外で外来語や他の日本語を学習する方法は、インターネットや輸入書籍を購入するくらいしかない。他に機会は少ないが、日本人の友人などを通して日本語を学習することも可能である。このように個人の置かれた環境の違いは、外来語をはじめ、日本語の語彙量の差を生じる。この差が、授業などで露呈することで学習者の意欲減退などの影響を及ぼすことも

ある。」

また、「国内外両者の環境の大きな差が露呈するものに日本語の発音学習が挙げられる。国内であれば教師は日本人で、標準的な日本語の発音を直接聞く機会が当然のように与えられ、学習者が正しい発音を習得しやすい環境にある。しかし、国外学習者の場合、全てが日本人教師の授業を受けているわけではなく、発音練習の点で不利が生じる。日本人以外の教師で、教師自身の発音が日本語として不明瞭であった場合、学習者が無意識に誤った、もしくは日本人が聞けば違和感を感じるような発音を正しいものとして習得してしまう恐れがある。」(佐藤, 2011 : 99-100)

4.3 英語母語話者向けのカタカナ語教育

堀切(2012)は「日本語学習場面で外来語に違和感を抱いている学習者に対し、学習者の母語や母文化と異なるものを客観的に認識できるように情報を提供し、その上で学習者自分なりの解釈・理解を促すことで、外来語の習得だけではなく、異文化受容においても統合的な対応へと繋がると考えられる」と述べた。(堀切, 2012 : 193-194)

佐藤(2011)は「国内の学習者に対し、外来語が供給過剰である問題は教育現場の内外を問わず当てはまることである。その問題を解決するために、教育機関側でも、ある程度の選定を図り、学習者への負担を軽減している」と指摘している。(佐藤, 2011 : 99)

第5章 考察

5.1 中国語母語話者の場合

本論の収集した中国語母語話者のカタカナ語習得に関わる先行研究の文献が合わせて28編である。その全部を「カタカナ語認識の傾向」、「カタカナ語習得過程における問題点」と「中国語母語話者向けのカタカナ語教育」の3つの方面に分類し、さらに、視点によって大雑把にいくつかのカテゴリーに分けたが、一面だけではなく、多角的な視点から中国語母語話者のカタカナ語習得問題・教育改善策を説明してきた研究が多い。それゆえ、研究動向を把握するために、視点の統計を行い、それに基づいて考察する。

統計方法としては、上述の28編の文献から、習得問題および教育改善策のポイントを抜粋して分類する。そして、それぞれのポイントを指摘した文献数を記入する。それにより、習得問題・教育改善策のポイント、および各ポイントに対する先行研究の重視程度が分かる。統計した結果は以下の通りである。

習得問題について、主に9つの問題点が見られる。関連文献数の多い順に「英語知識影響」、「教材の不足点」、「回避現象」、「母語知識影響」、「指導の不足点」、「誤用」、「苦手意識」、「カタカナ語自体の難点」、「言語環境の影響」である。(図36)

習得問題	文献数(編)
苦手意識	3
回避現象	7
誤用	4
カタカナ語自体の難点	3
母語知識影響	5
英語知識影響	11
教材の不足点	8
指導の不足点	5
言語環境の影響	2

(図36) 習得問題

特に「英語知識影響」を指摘した文献が11編で総数の4割程度である。カタカナ語習得における英語知識の影響が重視されていることが分かった。確かに、ほとんどの中国語母語話者の日本語学習者はある程度で「第二言語」の英語を把握した後に、日本語を学習しはじめる。さらに、おおよそ80%の日本語外来語が英語由来であるので、習得過程において、英語知識の援用が避けられないことが事実である。便利さを提供できる英語知識は習得問題になった原因は音訳されることが多い外来語が原語との発音・語彙のズレが存在しているため、英語原語の発音・語彙に拘りすぎると、逆に外来語の習得を妨げると考えられる。

次に「教材の不足点」について、教材に使用されているカタカナ語(外来語)の数が足りないという声が圧倒的に大きいことが分かった。筆者自分の日本語学習経験もそれに合致している。それ以外、教材中のカタカナ語(外来語)が出るところにその語の語源や原語をつけてほしいという意見もある。〔耿(2022)、霍(2021)〕

後は「指導の不足点」について、日本語教育者自身が片仮名、さらにカタカナ語に対して軽蔑の態度を抱き、カタカナ語を重視していないケースが多く指摘されている。〔李(2000) 鄧(2018)〕日本語教育者として、失格の姿勢であるとは言える。それに、授業現場で教材に載っていないカタカナ語を補充してほしい〔耿(2022)〕という学習者の意見もある。しかし、筆者自分の経験により、自分で特にカタカナ語の知識を学び、定期的なカタカナ語研修を受けている日本語教育者は極わずかである。

「苦手意識」と「回避現象」について、上述の「英語知識影響」、また母語の中国語を援用でき、習いやすい漢語に比べて、カタカナ語の習得が難しいという「母語知識影響」、および外国語から取り入れる時、省略現象、合成現象、品詞種類変化、二重表記〔唐(2007)、莊・呉(2011)〕などの「カタカナ語自体の難点」は「苦手意識」に強く繋がっていると考えられる。さらに、「回避現象」を引き起こす可能性が高いと想定されている。

カタカナ語(外来語)の誤用については、複数の種類はあるが、先行研究により、特殊拍に関する誤用が目立っていることが分かった。〔馮(2021)〕また、母音タイプ・子音タイプの誤用も多く見られる。〔馮(2021)、鄧(2018)〕

最後に「言語環境の影響」について、海外では日本にいるような本場の日本語環境を作ることが難しいことが分かった。〔耿(2022)〕それに、日本に滞在しても、日本語学習者のカタカナ語(外来語)発音が日本語化され、カタカナ語表記が逆にエラーに転じる現象も存在している。〔志村(2014)〕

教育改善策について、主に以下の8つの面から提案されている。関連文献数の多い順に「副教材の利用」、「カタカナ語重要性の強調」、「教材中の外来語の増加」、「英語援用」、「システムの利用」、「外来語の選別」、「表記規則の教授」、「語源知識の教授」である。
(図 37)

教育策略	文献数(編)
カタカナ語重要性の強調	5
教材中の外来語の増加	4
副教材の利用	6
外来語の選別	3
語源知識の教授	3
表記規則の教授	3
英語援用	4
システムの利用	4

(図 37) 教育改善策

最も多く言及されている「副教材の利用」は、日本語のアニメ、音楽、ドラマ、テレビ番組、映画、音楽などの作品を学習材として活用すれば、カタカナ語の補足になれる他、学習者の学習意欲・興味を惹き、視野を広げることができる。〔唐(2007)、王(2009)〕インターネットを利用して、情報を収集する時が多いので、デジタル時代のメリットに違いないと考えられる。

「教材中の外来語の増加」は上述の「教材の不足点」に対する改善策の1つであると考えられる。それに、「副教材の利用」の改善策も提案されている。

次に、「外来語の選別」について、流行語としての外来語は多く作られているが、その中、日本社会で普及され、多数の日本人に認められる外来語は極わずかである。日本語学習者は選別しなく、すべての外来語を受け入れるのはありえないことであると考えられる。従って、日本語学習者であれ、日本語教育者であれ、外来語を選別し、学習することが必要である。〔於・包(2012)〕

「カタカナ語重要性の強調」はカタカナ語教育の基本であると考えられる。カタカナ語の位置付けが分からなく、カタカナ語の学習を重視しないと、日本語学習者の全体的な日本語習得に影響を及ぼすに決まっている。

「英語援用」について、英語の学習時間と外来語の学習成果と有意な相関にあることが分かった。〔王(2009)〕カタカナ語教育において、英語援用を勧めることは非常に妥当な教育方法とは言えないが、英語知識のカタカナ語習得に対するポジティブな影響が存在しているので、ある程度の英語援用方法を日本語学習者に教えることも外来語教育を促進で

きると考えられる。

「語源知識の教授」について、筆者自分の日本語学習経験により、日本人の日本語教育者は外来語(カタカナ語)の語源・原語を重視していない。しかし、外来語(カタカナ語)を原語と比較すれば、日本語学習者の外来語(カタカナ語)に対するイメージを深めることができると考えられる。〔李(2011)〕さらに、語源・原語知識は外来語を習得するための英語援用にも役立てると考えられる。

「表記規則の教授」について、カタカナ語(外来語)の造語・表記における規則がないとは言えないが、1.3.2の節で述べたように、公式的な規則が一切存在していないことが事実である。ある程度のカタカナ語(外来語)規則を学習者に教えることで、学習者のカタカナ語(外来語)の記憶に役立てるが、その混雑する規則は把握しにくく、日本語学習者の大きな負担になる可能性があることが分かった。〔 荘・呉(2012)〕

最後に「システムの利用」について、本論の収集した文献の中にシステムを開発し、またはシステムを利用して授業を行うのは4編しかない。それぞれは聞き取りドリル型学習システム「KataLis」を開発した盧等(2007)、カタカナ語eラーニング教材「カタカナ語の世界」を開発した李・板谷(2006)、カタカナ語学習支援用文章変換システム「EULIKO」を開発した邸(2022)、及びスマートフォンの音声入力機能を活用し、授業実践研究を行った柴田(2018)である。どれも非常によい教育効果を得たことが分かった。

中国語母語話者のカタカナ語習得に関する先行研究の不足点については、以下の5点が考えられる。

- ①先行研究の数が非常に少ない。6つのデータベースを情報源にして、文献検索の指定期間を1999～2023年の25年間に設定し、キーワードを6組設けて選別した結果、わずかな28編しか選出されなかった。中国語母語話者(中国人)のカタカナ語(外来語)習得・教育問題が日本語教育研究者に重視されていないことが分かった。これ以降、より多くの関連研究が期待されている。
- ②先行研究における調査・実験の対象者の平均年齢は全部20歳以上であるが、今の中国語母語話者(中国人)の日本語学習者の中、中等教育を受けている学生(12～18歳)が少なくない。彼らのカタカナ語習得過程は成人学習者のと違うことが想定されている。それゆえ、彼らを対象として、研究を行うことが中国語母語話者(中国人)のカタカナ語習得研究を促進できると考えられる。
- ③中国語母語話者の多岐にわたるカタカナ語習得の問題点について、先行研究は調査や実験を通し、詳しく考察したが、それらに対応する教育改善策がほとんど意見または提案にとまり、カタカナ語教育現場で講じて、検証された改善策がほとんどないと見られている。
- ④上述のシステムを開発した3つの研究はカタカナ語教育現場で非常によい教育効果を得

たが、それらの実装は未だに普及されていないそうである。しかし、設備の要求があるので、オンラインシステムを普及することが非常に難しいと考えられる。それに対し、比較的普及しやすいカタカナ語の紙教材を改善して、教育現場で効果を検証した研究は1つも見つけられなかった。

- ⑤先行研究により、中国語母語話者のカタカナ語習得過程において、母語である中国語の援用と第二言語である英語の援用がそれぞれ日本語学習者のカタカナ語習得にポジティブ・ネガティブな影響を及ぼしていることが分かったが、具体的にどうやって中国語・英語を援用すればいいのか、先行研究では説明されていない。

5.2 英語母語話者の場合

本論の収集した英語母語話者のカタカナ語習得に関わる先行研究の文献が合わせて7編である。文献数が少ないので、統計分析を省き、直接にカタカナ語習得問題・教育改善策を考察する。

習得問題について、以下の4つの問題点が見られる。

①英語の母語影響。

英語母語話者の日本語学習者は日本語の語種より、外来語を英語として捉えることが多い。それに、英語援用ができるので、日本人より日本語外来語の使用を好み、カタカナ語と和語の使い分けが分からない時も母語の英語知識を援用する傾向があることが分かった。〔堀切(2010)、鄧(2018)、池谷・久津(2013)〕

②苦手意識。

カタカナ語(外来語)の習得過程で、母語の英語を基準として、違和感を感じるので、発音を聞いても、それを原語に繋ぐことが難しい。それにより、英語母語話者の日本語学習者は「使用抵抗」、「意味抵抗」、「学習困難」、さらに「不安」のカタカナ語(外来語)苦手意識が生じることが分かった。〔堀切(2010)、堀切(2012)、柴田(2018)〕

③異文化受容。

外来語に対する認識・感情・行動により、異文化受容の態度(境界・統合、分離・同化)が変化することが分かった。〔堀切(2012)〕

④言語環境の影響。

日本国内は外来語が「供給過剰」の環境である一方、海外の英語母語話者は外来語を接触する機会が圧倒的に少ないと見られる。それに、日本国内の日本人日本語教育者の日本語発音が標準的である。一方、海外の外国人の日本語教育者の日本語発音が日本語として不明瞭である可能性がある。国内外両者の環境は大きな差が存在していると考えられる。〔佐藤(2011)〕

そして、教育改善策について、2点しか言及されていない。

- ①日本語学習者に異文化受容の情報を提供し、母文化と異文化の違いを客観的に認識させ、彼らの異文化受容態度を「統合」にさせると主張している。〔堀切(2012)〕
- ②日本国内の言語環境にある「過剰」な外来語を選別した後、日本語学習者に教える方法が考えられる。〔佐藤(2011)〕

英語母語話者のカタカナ語習得に関する先行研究の不足点については、以下の6点が考えられる。

- ①先行研究の数が極めて少ない。同様に先行研究数が少ない中国語母語話者の場合に比べても、かなり少ないとは言える。
- ②英語母語話者のカタカナ語(外来語)習得過程における英語影響・英語援用に注目しすぎると、他の影響因子を見落としてしまったと考えられる。
- ③鄧(2018)の示した(図30)と(図31)以外、英語母語話者の学習者のカタカナ語(外来語)における誤用に言及した研究はない。
- ④英語母語話者向けのカタカナ語(外来語)教材を考察したことはないと思われる。
- ⑤英語母語話者向けのカタカナ語(外来語)指導に関わる改善策が極わずかで、視点が単一化であることが分かった。
- ⑥英語母語話者のカタカナ語認識傾向に研究の重点が置かれ、英語母語話者向けのカタカナ語習得問題・教育改善策が重視されていないことが分かった。

5.3 中国語・英語母語話者の習得対照

本論は中国語母語話者と英語母語話者の日本語学習者を中心にして、カタカナ語習得に関する諸問題、及びそれに対応する教育改善策を考察してきた。

各種の言語の母語話者から特に中国語母語話者と英語母語話者を選び出した理由として、日本語の語種は和語・漢語・外来語・混種語の4種類であり、割合が大きい漢語は中国語母語話者にとって母語援用ができ、習得しやすく、なじみの深い語種である。さらに、重要な位置を占めているカタカナ語(外来語)も第二言語である英語の知識を援用できる。つまり、カタカナ語習得過程において、中国語母語話者が既習言語の影響を大きく受けている。同様に、英語由来の外来語(全外来語の8割程度)は英語母語話者にとっても、母語援用ができ、習得しやすく、なじみの深い語種である。彼らのカタカナ語習得過程においても、既習言語の影響を大きく受けている。

従って、両者の習得過程を対照することで、カタカナ語習得・教育の研究だけではな

く、日本語習得・教育の研究にも役立つと考えられる。

上述の背景を踏まえて、中国語母語話者と英語母語話者のカタカナ語習得を対照する。

まずは収集した文献数について、合わせて35編の中、中国語母語話者に関わるのは28編であり、8割を占めている。一方、英語母語話者に関わる文献数はわずか7編である。原因としては、まず英語母語話者の日本語学習者の人数（約60万人）は中国語母語話者の日本語学習者（約100万人）より少ない。それに、英語母語話者の分布範囲が広すぎ、各国の母国の日本語学習者を対象とする研究が多いが、一括に「英語母語話者」全体を対象とする研究が少ないと想定されている。また、英語由来の外来語（カタカナ語）が多数であり、英語母語話者は母語援用で習いやすいので、特に彼らを対象とする外来語（カタカナ語）習得・教育の研究の必要性が疑われている可能性があると考えられる。それに対し、中国語母語話者は中国に集中している。彼らにとってなじみのないカタカナ語の習得が難点であり、彼らを対象としてのカタカナ語習得・教育の研究が必要であるので、関連研究が多いと考えられる。

次にカタカナ語の習得問題について、最も目立っている問題点は英語知識の影響である。英語援用は外来語（カタカナ語）習得にポジティブな影響を及ぼす一方、外来語（カタカナ語）と英語原語のズレで違和感を感じられ、外来語（カタカナ語）習得にネガティブな影響を及ぼすことは両方共通の問題点である。それに対して、中国語母語話者はカタカナ語の重要性が分かっているが、母語干渉による回避傾向で、カタカナ語使用を好んでいない一方、英語母語話者は母語援用により、日本人よりカタカナ語使用を好んでいる現象が見られる。カタカナ語の誤用について、両方の誤用種類・パターンが大抵一緒であるが、中国語母語話者の誤用数が英語母語話者より多いことが明らかになった。第二言語語彙力と母語語彙力の差が主な原因であると考えられる。教材・指導の不足について、中国語母語話者の場合は多岐にわたり、詳しく考察されている。一方、英語母語話者の場合はあまり考察されていないことが分かった。原因として、母語援用の便利さで、外来語（カタカナ語）の教材・指導などの教授要素より、英語母語話者の外来語（カタカナ語）習得・使用傾向が重視されていることが想定されている。言語環境の影響について、両方とも日本国内の本場の日本語環境において、カタカナ語の習得が促進される一方、海外の言語環境において、カタカナ語の習得が進まないことが明らかになった。

それに、カタカナ語の教育改善策について、両方とも雑多な外来語（カタカナ語）を選別し、日本社会で普及され、多数の日本人に認められるのを選び出す必要性を指摘している。また、英語母語話者向けのカタカナ語教育改善策の1つとして、異文化受容態度の改善が提案されている。英語母語話者の場合、それ以外の教育改善策が見られていない。上述の通り、母語援用の便利さにより、教育改善策の必要性が疑われていることが原因であると考えられる。一方、副教材の利用、システムの利用、表記規則の教授などの中国語母語話者向けのカタカナ語の教育改善策がたくさん提案されている。中国語母語話者向けのカタカナ語教育が重視されていることが分かった。

今後の課題

先行研究を踏まえて、英語母語話者のカタカナ語習得・教育に関する研究が極めて少なく、英語母語話者を対象とする多岐にわたるカタカナ語研究が期待されている。さらに、教育現場でカタカナ語の教育改善策を講じて、教育効果を検証することが今後の最も重要な課題であると考えられる。特に、「オンライン学習システムの実装」、及び「教科書の外来語語源・原語の添付」は、最も日本語学習者のカタカナ語(外来語)習得を促進できる教育改善策であると筆者が確信している。

本論は6組のキーワードを設けて、6つのデータベースから、1999～2023年の25年間の中国語母語話者・英語母語話者のカタカナ語習得・教育に関する文献を収集し、選別したが、選び出された文献の数が極少ない。より説得力のある分析結果を得るために、さらに多くのデータベースから文献を選別すると考えられる。

謝辞

まず、本論文の執筆にあたり、研究の進め方、論文の書き方に至るまで丁寧にご指導を賜りました主指導教員である本田弘之教授に心より感謝申し上げます。

また、論文作成にあたり、様々なご助言を頂きました副指導教員である橋本敬教授、副テーマ指導教員である郷右近英臣准教授に深くお礼を申し上げます。

最後になりますが、本研究は「文献総説」です。本研究で取り上げた先行研究を成し遂げ、その成果を公開してくださったすべての日本語教育研究者に深く感謝いたします。

参考文献

- [1] 成田徹男・榊原浩之. (2004). 「現代日本語の表記体系と表記戦略——カタカナの使い方の変化」, 『人間文化研究』, 02, pp. 41–55.
- [2] 篠塚勝正・窪田三喜夫. (2012). 「日本語文字形態(漢字, ひらがな, カタカナ)による認言語処理の差異」, 『成城文藝』, 221, pp. 84–98.
- [3] 村越行雄. (1998). 「複雑化された日本語の文字表記: 文字文化論」, 『跡見英文学』, 12, pp. 11–35.
- [4] 「1991 年内閣告示第 2 号」——「外来語の表記に用いる仮名と符号の表」
- [5] 王玉峰. (2021). 「造語法による英語からの外来語の構成形式について」, 『日本言語文化研究』, 05, pp. 86–92.
- [6] 一般財団法人テクニカルコミュニケーター協会編: 『外来語(カタカナ)表記ガイドライン—第3版』
- [7] 清水稔. (2010). 「外来文化の受容の歴史から見た日本の外国語学習と教育について」, 『文学部論集』, 94, pp. 01–14.
- [8] 見坊豪紀・水谷静夫・石綿敏雄・宮島達夫. (1964). 「現代雑誌九十種の用語用字第三分冊—分析」, 『国立国語研究所報告』, 25.
- [9] 国立国語研究所. (1994). 「現代雑誌 200 万字言語調査の語彙表データ」, 『国立国語研究所報告』, 121.
- [10] 大西勝也. (1993). 「『BS ファッション情報』にみるカタカナ外来語の使用実態」, 『放送研究と調査』, 43(12), pp. 32–41.
- [11] 塩田雄大. (2022). 「“外来語の増加に賛成”が6割〜2022年『日本語のゆれに関する調査』から(1)〜」, 『放送研究と調査』, 72(12), pp. 22–39.
- [12] 文化庁. (2013). 「平成 24 年度『国語に関する世論調査』の結果について」, pp. 01–24.
- [13] 井上逸平・土手康瑛・松永英美子・内藤篤志・友成亮太・小西麻亜耶・寺三希子. (2006). 「コミュニケーションの生態系—現代日本の若年層言語使用を中心として—」, 『慶應義塾大学日吉紀要言語・文化・コミュニケーション』, 36, pp. 1–17.
- [14] 山田雄一郎・難波恭子. (1999). 「外来語批判—最近 50 年間の新聞資料の検討」, 『広島修大論集—人文編』, 40(1), pp. 143–181.
- [15] 山田雄一郎. (2007). 「現代のコミュニケーションと外来語」, 『言語』, 36(6), pp. 22–29.
- [16] 鈴木孝夫. (2000). 『閉された言語・日本語の世界—鈴木孝夫著作集 2』, 岩波書店, pp. 120–147.
- [17] 「PRISMA 2020」—— Flow Diagram for new systematic reviews (<http://www.prisma-statement.org/PRISMAStatement/FlowDiagram>)

- [18] 山下直子・畑ゆかり・轟木靖子. (2013). 「中国語母語話者を対象としたカタカナ語の聞き取りテストとカタカナに対する意識」, 『香川大学教育実践総合研究』, 26, pp. 41-48.
- [19] 田島毓堂・金華. (2011). 「共通テーマ『人と風土』日本語の外来語の増加と中国の日本語教育」, 『人間文化：愛知学院大学人間文化研究所紀要』, 26, pp. 138-128.
- [20] 时代. (2017). 「日语学习者日语外来语学习意识研究」, 『科教文汇(下旬刊)』, 30, pp. 174-175+178.
- [21] 鄧琪. (2018). 「中国人日本語学習者の外来語使用に対する一考察：『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』を用いた調査をふまえて」, 『Learner Corpus Studies in Asia and the World』, 03, pp. 241-261.
- [22] 志村順子. (2014). 「中国語を母語とする JSL 学習者のカタカナ語表記習得過程に関する縦断的研究」, 『言語と文明』, 12, pp. 51-68.
- [23] 大和祐子・玉岡賀津雄・初相娟. (2010). 「中国人日本語学習者による外来語および漢字語の処理における学習期間の影響」, 『ことばの科学』, 23, pp. 101-119.
- [24] 大和祐子・玉岡賀津雄. (2011). 「日本語テキストのオンライン読みにおける漢字表記語と片仮名表記語の処理—中国人日本語学習者の語彙能力上位群と下位群の比較」, 『小出記念日本語教育研究会論文集』, 19, pp. 73-86.
- [25] 玉岡賀津雄. (2018). 「言語間の語彙的結合：中国人日本語学習者による L3 日本語の外来語処理における L1 中国語と L2 英語の影響」, 『中国語話者のための日本語教育研究』, 09, pp. 17-34.
- [26] 大和祐子・玉岡賀津雄. (2013). 「中国人日本語学習者による外来語処理への英語レキシコンの影響」, 『レキシコンフォーラム』, 06, pp. 229-267.
- [27] 徐陽. (2017). 「中国語を母語とする日本語学習者による外来語の聞き取りと産出—英語の語彙知識と日本語特殊拍の影響—」, 首都大学東京修士論文, pp. 01-24.
- [28] 馮紹偉. (2021). 「日本語の外来語に対する中国人日本語学習者の認知傾向についての研究」, 鳴門教育大学修士論文, pp. 176-177.
- [29] 周菁. (2011). 「日语外来语学习策略调查分析」, 『浙江外国语学院学报』, 05, pp. 27-32.
- [30] 王凤. (2009). 「日语专业大学生外来语学习策略研究」, 重庆大学硕士学位论文, pp. 01-46.
- [31] 唐燕. (2007). 「试论日语教学中的外来语教育问题」, 『商情(教育经济研究)』, 02, pp. 46-47.
- [32] 庄凤英・吴丹红. (2011). 「日语外来语学习障碍分析(上)」, 『日语知识(12)』, pp. 24-26.
- [33] 庄凤英・吴丹红. (2012). 「日语外来语学习障碍分析(下)」, 『日语知识(01)』, pp. 25.
- [34] 李洁. (2000). 「日语外来语教育中的问题及其对策」, 『淮海工学院学报(自然科学版)』,

02, pp. 46–48.

- [35] 罗容华. (2015). 「中国日语学习者的外来语回避现象调查研究」, 重庆大学硕士学位论文, pp. 01–47.
- [36] 沈欢・李依钿・吴丽. (2019). 「中国日语学习者外来语习得考察—基于日语专业高年级阶段的问卷调查」, 『知识文库』, 09, pp. 71–72.
- [37] 霍文娜. (2021). 「中国日语学习者的外来语误用研究」, 哈尔滨师范大学硕士学位论文, pp. 01–62.
- [38] 李瑜. (2011). 「日语教学中的外来语学习难点及方法分析」, 『赤峰学院学报(科学教育版)』, 07, pp. 50–51.
- [39] 王伸子. (2011). 「中国語母語話者の日本語外来語彙習得に関する諸問題」, 『専修人文論集』, 88, pp. 1–15.
- [40] 耿耀耀. (2022). 「中国日语学习者外来语习得的影响因素」, 北京外国语大学硕士学位论文, pp. 01–73.
- [41] 于衛紅・包賀喜格図. (2012). 「日本語外来語の勉強法についての考え：中国人日本語学習者を中心に」, 『九州共立大学研究紀要』, 2(2), pp. 79–82.
- [42] 柴田陸杜・野崎浩成・梅田恭子・江島徹郎. (2018). 「中国人日本語学習者向けのカタカナ語の学習—スマートフォンの音声入力機能を活用して—」, 『JSiSE 研究会研究報告』, 33(2), pp. 35–42.
- [43] 邱冲. (2022). 「中国人日本語学習者のカタカナ語回避現象を改善する日本語学習システム」, 北陸先端科学技術大学院大学修士論文, pp. 01–35.
- [44] 李峰榮・板谷. (2006). 「中国人向けカタカナ語 e ラーニング教材の開発と視覚的刺激的有効性の検証」, 『情報学研究：朝日大学経営学部電子計算機室年報』, 15, pp. 51–58.
- [45] 盧颯・山下直子・富永浩之・林敏浩・山崎敏範. (2007). 「KataLis：中国人留学生のカタカナ語聞き取りの弱点に着目したドリル型学習システム」, 『教育システム情報学会誌』, 24(4), pp. 323–332.
- [46] 堀切友紀子. (2010). 「英語を母語とする日本語学習者の外来語使用行動の実態とその背景要因」, 『言語文化と日本語教育』, 39, pp. 104–111.
- [47] 堀切友紀子. (2012). 「英語を母語とする日本語学習者の外来語に対する認識・感情・行動と異文化受容態度との関連」, 『人間文化創成科学論叢』, 14, pp. 187–195.
- [48] 池谷知子・久津木文. (2013). 「英語を母語話者とする日本語学習者におけるカタカナ語の研究—Tea とティーとお茶は同じなのか—」, 『Theoretical and applied linguistics at Kobe Shoin：トークス』, 16, pp. 21–36.
- [49] 池谷知子・久津木文. (2014). 「英語を母語話者とする日本語学習者におけるカタカナ語の研究(II)：習得しやすいカタカナ語と習得しにくいカタカナ語」, 『Theoretical and applied linguistics at Kobe Shoin：トークス』, 17, pp. 27–45.

- [50] 池谷知子・久津木文. (2015). 「英語を母語話者とする日本語学習者におけるカタカナ語の研究(III)ーカタカナ語と非カタカナ語の使い分けと日本語レベルの関係ー」, 『Theoretical and applied linguistics at Kobe Shoin: トークス』, 18, pp.25ー43.
- [51] 堀切友紀子. (2008). 「日本語学習者の外来語に対する苦手意識と受容態度ー英語母語話者の場合」, 『異文化間教育学会紀要編集委員会編』, 28, pp.74ー86.
- [52] 佐藤暁人. (2011). 「英語母語話者対象の日本語教育における英語起源の外来語の扱い」, 『敬愛大学国際研究』, 24, pp.77ー104.